

平成 22 年度 地域別研修
「中米カリブ地域 住民参加型
農村開発ネットワーク運営・管理」
フォローアップにかかる調査報告書

平成 23 年 2 月
(2011 年)

独立行政法人国際協力機構 (JICA)
筑波国際センター

筑波セ
JR
11-001

序 文

独立行政法人国際協力機構（以下、「JICA」）は、「人」を通じた技術協力のひとつとして、研修員受入事業を実施しています。研修員受入事業は、途上国から、国づくりの担い手となる研修員を我が国または途上国に受入れ、行政、農林水産、鉱工業、エネルギー、環境、防災、保健・医療、運輸、通信、教育等多岐にわたる分野で、専門的知識や技術を移転することにより人材育成支援を図ることを目的とした事業であり、年間 3 万人を超える研修員を受入れています。

JICA 筑波国際センター（以下、「JICA 筑波」）では、農業分野と教育分野を中心とした研修員受入事業を実施しており、平成 22 年度に実施した研修コースのひとつに「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」コースがあります。本コースは、平成 17 年度から平成 19 年度にかけて実施した「中米カリブ地域 住民参加型農村開発プロジェクト運営・管理」コースを前身としており、平成 22 年度で三年目の実施となりました。

今般、研修対象国のうち、コスタリカ、グアテマラ、メキシコ 3 カ国に訪問し、帰国研修員活動サイトの調査や帰国研修員ネットワークの今後についての協議等を目的として、フォローアップ調査団を派遣しました。

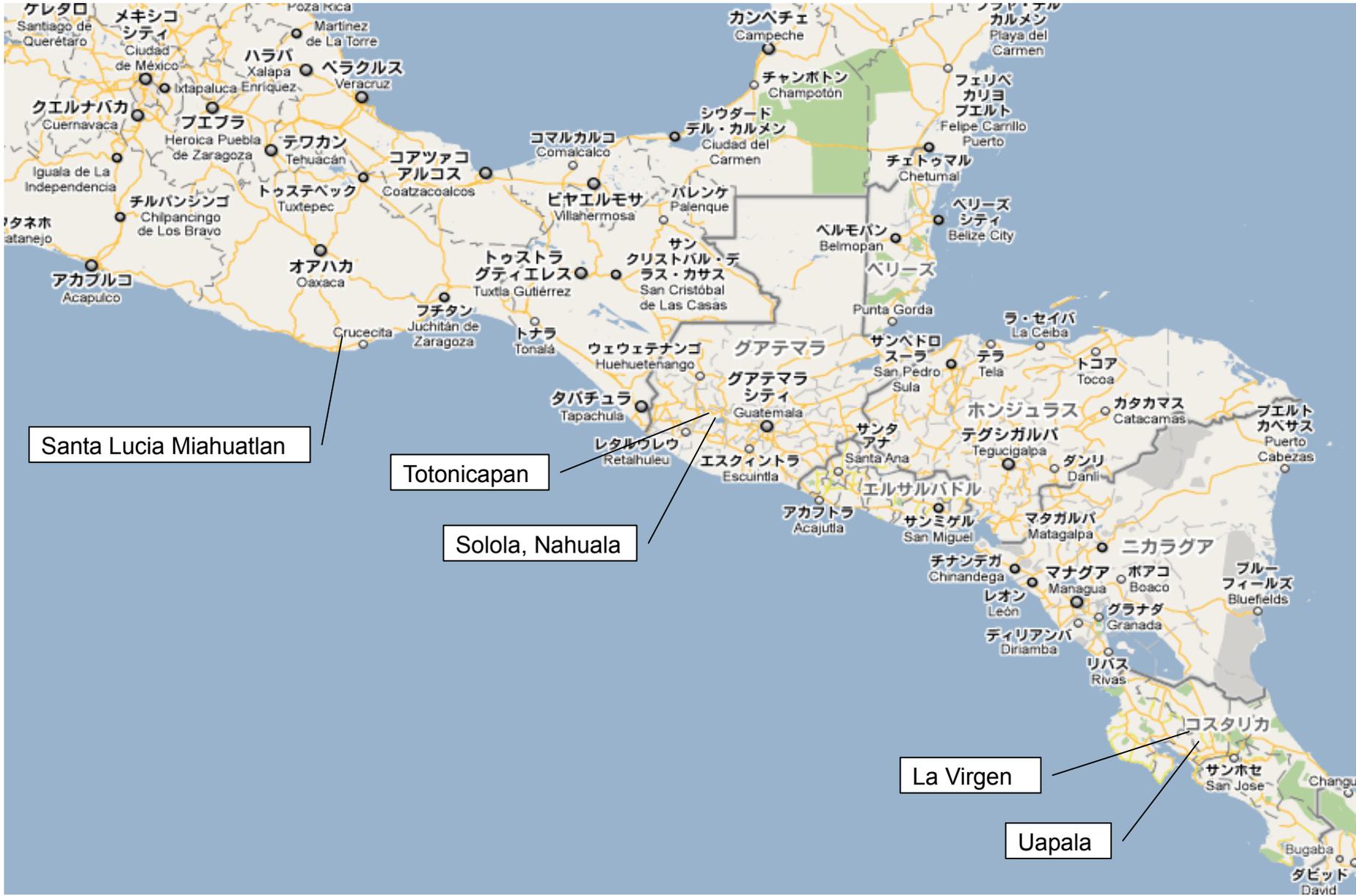
本書が、今後の研修コースの計画策定のみならず、開発途上国への生活改善アプローチの応用および帰国研修員ネットワークの構築・運営に関する一層のご理解の一助となればと願うばかりです。

本調査の実施にあたり、多大なるご協力とご尽力をいただいた内外の関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。今後の事業実施にあたって、一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

平成 23 年 2 月
独立行政法人国際協力機構
筑波国際センター
所長 佐藤武明

略 語 表

略語	スペイン語 (英語)	和訳
CAC	Consejo Agropecuario Centroamericano	中米農業協議会 (SICA 傘下)
CEDESAM	Centro para Desarrollo Sostenible Ambiental	持続的環境開発センター
CEIBI	Centros de Educación Infantil Bilingüe Intercultural	異文化・言語児童教育センター(グアテマラ)
COCODE	Consejo Comunitarios de Desarrollo	コミュニティ開発審議会 (グアテマラ)
DRP (PRA)	Participatory Rural Appraisal (Diagnóstico Rural Participativo)	参加型農村調査法
ECADERT	Estrategia Centroamericana de Desarrollo Rural Territorial 2010-2030	中米地域農村開発戦略 (2010-2030)
FGT	FUNDACION GUILLERMO TORIELLO	GUILLERMO TORIELLO 基金(グアテマラ NGO)
GAT	grupo accion territorial	テリトリーアクショングループ
IDA	Instituto de Desarrollo Agrario	コスタリカ農業開発研究所
IICA	Instituto Interamericano de Cooperación para la Agricultura	米州農業協力機構
JOCV	(Japan Overseas Cooperation Volunteers)	JICA 青年海外協力隊
MAG	Ministerio de Agricultura y Ganadería	コスタリカ農牧省
MAGA	Ministerio de Agricultura, Ganadería y Alimentación	グアテマラ農牧食糧省
PAPROSOC-2	Proyecto sobre Asistencia para el Desarrollo Rural Sustentable en la Región del Soconusco	チアパス州ソコヌスコ地域持続的農村開発プロジェクト (メキシコ)
PDR	Programa de Desarrollo Rural	農村開発プログラム (コスタリカ農牧省普及局内設置)
REDCAM. drp	RED CENTROAMERICANA, DEL CARIBE y MEXICO EN DESARROLLO RURAL PARTICIPATIVO	中米カリブおよびメキシコ参加型農村開発ネットワーク
SAGEPLAN	Secretaría de Planificación y Programación de la Presidencia	グアテマラ大統領企画庁
SEDESOL	Secretaria de Desarrollo Social	メキシコ社会開発省
SICA	Sistema de Integración Centroamericana	中米統合機構
SV	(Senior Volunteers)	JICA シニア海外ボランティア



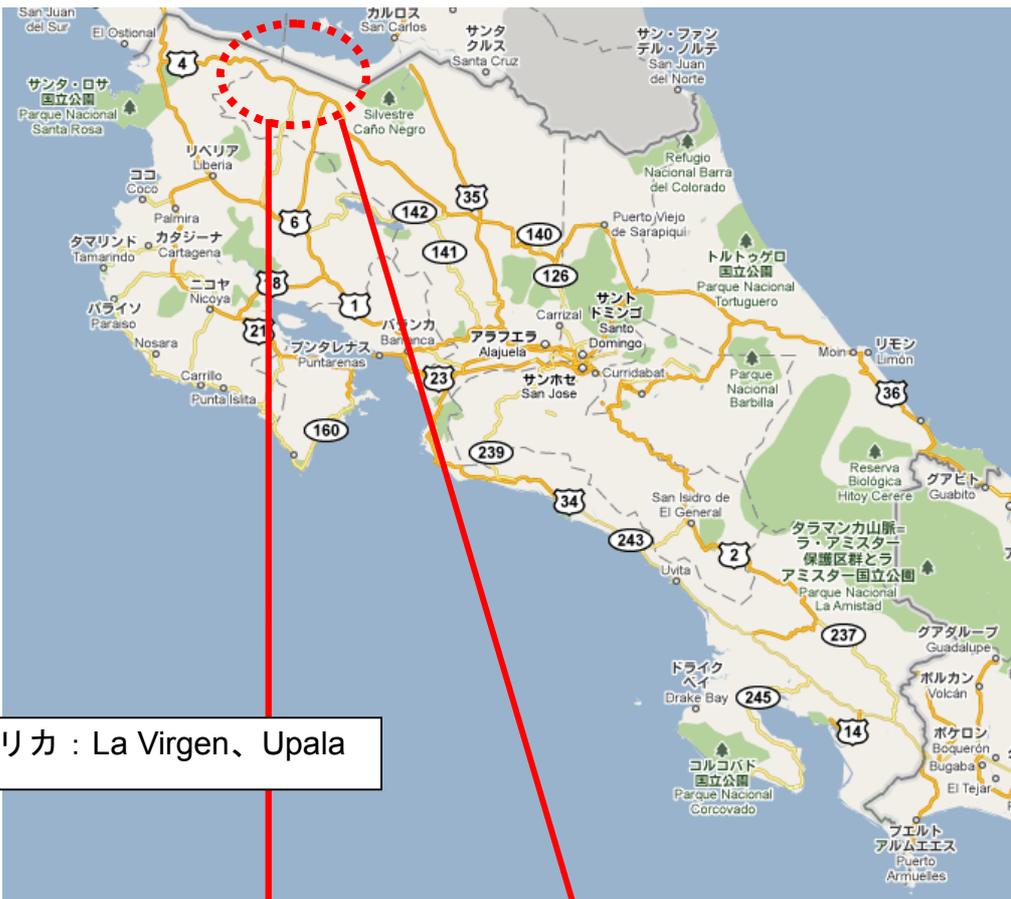
Santa Lucia Miahuatlan

Totonicanpan

Solola, Nahuala

La Virgen

Uapala



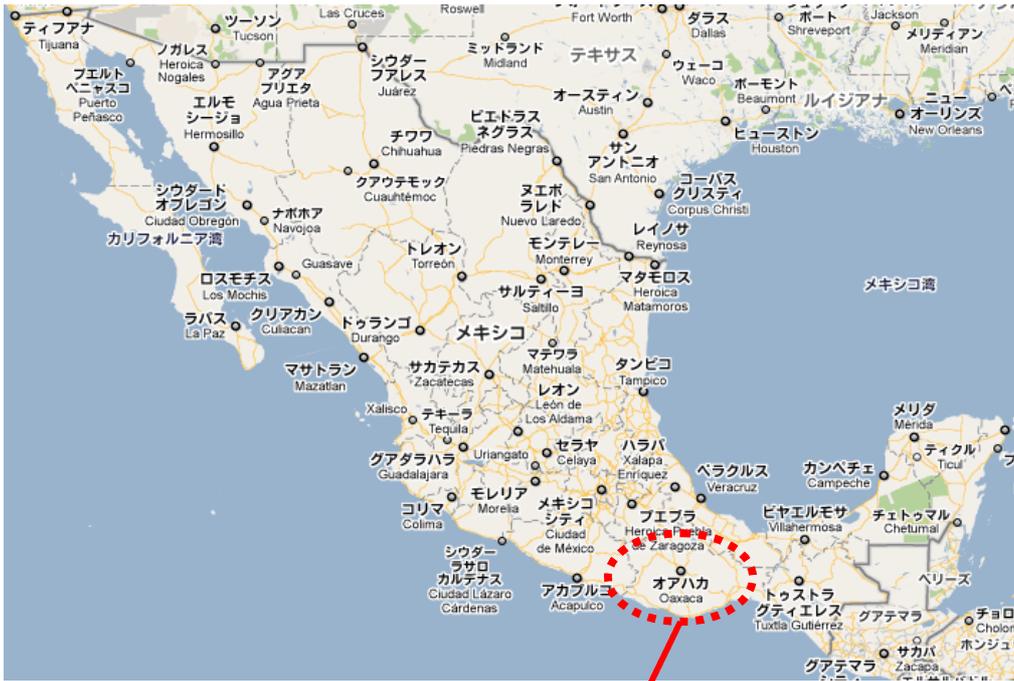
コスタリカ : La Virgen、Upala





Guatemala : ソロラ市 Nahuala、
Totonicapan





メキシコ：オアハカ州サンタ・ルシア ミアワトラン



【コスタリカ】



在外補完研修実習中の様子①



在外補完研修実習中の様子②



AMAGRO 活動開始後に修繕がなされた。



AMAGRO コミュニティ女性が住居改善活動を説明。

【グアテマラ】



帰国研修員（右）による活動サイト説明。



コミュニティによる小橋梁建設現場。



村落周辺の急峻な土地にトウモロコシが栽培されている。



有機農業圃場にてコミュニティのリーダーによる活動説明。



地域会議での各国戦略作成ワークショップの様子。



地域会議での幹事国選挙の様子。



2010年度研修員最終報告会の様子。



2010年度 REDCAM コース閉講式の様子。

【メキシコ】



KAIZEN チーム代表者 24 名による活動報告会の様子。手前下のカゴもグループの成果品。



KAIZEN チームの多くが取り組んでいる刺繍作品の紹介。



KAIZEN チームが最初に取り組んだ洗濯場の改善成果。村落に自生している植物の茎を壁に利用している。



栄養改善のための野菜栽培活動の収穫物。

目 次

序文

略語表

現地調査訪問先地図

写真

第1章 調査の概要.....	1
1-1 背景と目的.....	1
1-2 団員構成.....	2
1-3 調査日程.....	3
1-4 主要面談者.....	5
第2章 各訪問先調査概要.....	9
2-1 コスタリカ.....	9
2-2 グアテマラ.....	11
2-3 メキシコ.....	15
第3章 調査結果.....	16
3-1 コスタリカ.....	16
3-2 グアテマラ.....	21
3-3 メキシコ.....	28
第4章 所感.....	34

別添資料

1. 平成22年度「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」本邦研修概要
2. 現地協議録
3. コスタリカ帰国研修員の発表資料
4. 地域会議資料（JICA 筑波）
5. 狐崎団員資料
6. パイロットプロジェクト評価シート（Vivamos Mejor 協会）
7. 地域会議ワークショップ「地域 REDCAM について」実施結果
8. メキシコ SEDESOL 活動報告資料

第1章 調査の概要

1-1 背景と目的

(1) 背景

JICA は、平成 17 年度から 19 年度まで 3 年間にわたり、中米カリブ地域別研修「住民参加型農村開発プロジェクト運営管理」を実施した。本研修は、日本の戦後農村開発の経験である生活改善アプローチの活用、帰国研修員による具体的な取組みの発現、在外事務所のナショナルスタッフの主体的参加の推進、各国のプログラムとの連携強化を目指し、一部の対象国においては政策レベルのインパクトが発現する等、成果を残している。さらに更新案件である中米カリブ地域別研修「住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」（以下 REDCAM コース）および中南米地域別研修「農村部生活改善を通じた女性のリーダーシップ育成」（以下、準高級コース）コースとの連携により、帰国研修員ネットワークの人数は 100 名を超え、帰国研修員による積極的な生活改善活動が実施されている。この帰国研修員ネットワークを REDCAM(. drp) と呼ぶ。同ネットワークは各国内のネットワークと 8 か国代表から成る地域ネットワークの二層で構成されている。なお、準高級コースは「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」として平成 22 年度より三年間の更新案件実施が予定されている。

過去 5 年間に亘るネットワーク活動により、国毎に活動や体制構築において進捗に差が現れている。また地域レベルでのネットワーク運営体制が関係者間で統一の認識がなく、活動の継続性・自立発展性の担保に疑問が生じている。

かかる状況の中、2010 年度 4 月より本邦、在外事務所協働で課題解決に向けた議論を重ねてきた。今回、JICA 筑波職員および有識者の協力を得て、現地関係者との協議によって「国別ネットワーク戦略（2011-2013 年）の策定」および「地域ネットワーク運営体制の確立」を図る。

(2) 目的

- A) 地域・国内ネットワークの体制の今後のあり方を明確化
- B) 地域・国内ネットワークの体制構築、方向性共有
- C) 過去の活動とりまとめ（評価項目の検討）

(3) 内容

ア) 現地視察・調査

⇒現状把握を通じて、今後の国内ネットワーク体制の構想を明確化する（A）。さらに評価できる項目、入手可能な情報を抽出し、今後の報告書様式の作成に役立てる（C）。帰国後、

抽出した項目に沿った様式を各国ネットワークに送付、回収し、2011 年度前半には過去 6 年間の成果とりまとめを行う。

イ) 国内ネットワークメンバー、ナショナルスタッフ、JICA 事務所との協議

⇒協議を通じてまず国内ネットワークのヴィジョンを共有する (A)。またそれに向かって協働することで合意する (B)。さらに評価できる項目について共通認識を深める (C)。特にグアテマラにおいて、在外補完研修中に地域ネットワークの会合があるため、全体での協議が可能。

ウ) 先方政府および関連機関との協議

⇒先方政府との協議で今後のネットワーク運営のあり方を明確化する (A)。JICA からの要望およびヴィジョンを説明することで、協力を取り付けることを目指す (B)。

特にメキシコの SEDESOL、コスタリカの MAG においては中枢幹部が関連コースの帰国研修員であり、今後の協力取り付け可能性が高い。グアテマラにおいては複数の先住民族組織・NGO 等の帰国研修員所属組織を中心に協議し、非政府組織主体のネットワーク参加国における将来像を明確にする。

1-2 団員構成

	調査団員氏名	担当分野	所属 (役職)	出発日～帰国日
1	浅野 哲	総括	JICA 筑波 研修業務課 (課長)	2010 年 11 月 25 日～ 2010 年 12 月 7 日
2	狐崎 知己	生活改善	専修大学 経済学部 (教授)	2010 年 12 月 4 日～ 2010 年 12 月 13 日
3	古田 国之	計画調整	JICA 筑波 研修業務課	2010 年 11 月 25 日～ 2010 年 12 月 16 日

1-3 調査日程

日付 (2010年)		行程	場所	宿泊地
11月25日	木	コスタリカ着(浅野団員、古田団員)		Liberia
11月26日	金	JICA コスタリカ事務所	JICA 事務所	Liberia
11月27日	土	移動: San Jose → AMAGRO パイロットプロジェクト視察 移動: AMAGRO → San Jose	AMAGRO	San Jose
11月28日	日			San Jose
11月29日	月	コスタリカ MAG 協議 IICA-CAC 協議	MAG IICA	San Jose
11月30日	火	関連 NGO 協議 JICA コスタリカ報告	関連機関 JICA 事務所	San Jose
12月1日	水	移動: コスタリカ → グアテマラ JICA 協議	JICA 事務所	Guatemala city
12月2日	木	SAGEPLAN、FGT、Sierra Madre 基金 との協議 移動: Guatemala city→ Quetzaltenango	Guatemala City	Quetzaltenango
12月3日	金	サイト訪問(Santa Catarina Ixtahuacan および Nahuala)	Quetzaltenango	Quetzaltenango
12月4日	土	(狐崎団員到着) サイト訪問(Totonicapan) 移動: Quetzaltenango→ Guatemala city	Totonicapan	Quetzaltenango
12月5日	日	8カ国 JICA ナショナルスタッフと の協議 (浅野団員出発)	Guatemala city	Guatemala city
12月6日	月	移動: Guatemala city→ Quetzaltenango 狐崎団員による講義	Quetzaltenango	Quetzaltenango
12月7日	火	地域会議	Quetzaltenango	Quetzaltenango
12月8日	水	地域会議	Quetzaltenango	Quetzaltenango
12月9日	木	REDCAM2010 研修員アクションプラ ン発表会	Quetzaltenango	Quetzaltenango

		REDCAM 各国代表者活動報告会		
12月10日	金	移動：Quetzaltenango→ Guatemala city 閉講式	Hotel Raddison	Guatemala city
12月11日	土	移動：グアテマラ → メキシコ (狐崎団員出発)		Mexico city
12月12日	日	移動：Mexico city → Oaxaca SEDESOL 関係者との協議	Oaxaca	Oaxaca
12月13日	月	サイト訪問(Santa lucia auamitlan) 移動：Oaxaca → Mexico city	Oaxaca	Mexico city
12月14日	火	JICA 協議（「中南米地域 生活改 善を通じた農村開発」コース研修候 補者含む。）	JICA 事務所	Mexico city
12月15日	水	メキシコ発		
12月16日	木	日本着		

1-4 主要面談者

(1) コスタリカ

・ JICA コスタリカ支所

No	氏名	所属／職位
1	一柳 直仁	支所長
2	柳原 真紀子	企画調査員
3	Silvia Camacho	REDCAM 担当 ナショナルスタッフ

・ 在コスタリカ日本大使館

No	氏名	所属／職位
1	後藤 修二	参事官
2	渡部 藤孝	二等書記官（経済・経済協力担当）
3	Tanaka Yasuhiro	Agregado de Economía y Cooperación

・ SICA / CAC

No	氏名	所属／職位
1	Óscar Quesada Madriz	Plan de apoyo a las estrategias regionales Secretaría Ejecutiva del CAC / Fondo España-SICA
2	Ricardo Montero López	Especialista en políticas e integración regional Secretaría Ejecutiva del CAC / Fondo España-SICA (元 JICA コスタリカ ナショナルスタッフ)

・ MAG

No	氏名	所属／職位
1	Juan Ricardo Wong Ruiz	MAG PDR director (2007 年度中南米地域別研修「農村部生活改善を通じた女性のリーダーシップ育成」コース帰国研修員)
2	QUIROS QUIROS Erick Antonio	Director / Superior Rectory, Ministry of Agriculture and Livestock (2010 年度地域別研修「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」研修員)
3	Heiner Murillo Chaves	Coordinador Proyecto de Desarrollo Rural La Cruz, Guanacaste (REDCAM コース 2005 年度帰国研修員)

4	Oscar Vásquez Rosales	MAG Dirección Regional Chorotega / Director
5	Vera Varela	MAG PDR (REDCAM コース 2009 年度帰国研修員)
6	DIAZ PORRAS Alex Alberto	Manager / CEDRAL Agricultural Services Agency / Ministry of Agriculture and Livestock (「中米・カリブ地域 小規模農民支援 有機農業技術 普及手法」コース 2010 年度帰国研修員)
7	BENAVIDES MORAGA Anabelle	Regional Coordinator / Rural Development Programme, Ministry of Agriculture and Livestock (「中米・カリブ地域 小規模農民支援 有機農業技術 普及手法」コース 2008 年度帰国研修員)

(2) グアテマラ

・ JICA グアテマラ駐在員事務所

No	氏名	所属／職位
1	佐々木 健雄	所長
2	青木 英剛	次長
3	Claudia Morales	ナショナルスタッフ (REDCAM 主担当)
4	Cindy Morales	ナショナルスタッフ

・ 帰国研修員

No	氏名	所属／職位
1	Ana Elsa del Carmen MANCIA VIDES	Vivamos Mejor Association Coordinator of the Agricultural-Ecological Program (2006 年度 REDCAM コース帰国研修員)
2	SAMINES DE IBATE Evangelina	Central Committee of Social Action (2007 年度 REDCAM コース帰国研修員)
3	ALVAREZ CHOYON Santos Florencio	Vivamos Mejor Association/Vivamos Mejor 協会 (2009 年度 REDCAM コース帰国研修員)
4	NOJ XOYON Maria Josefina	Waqaquib' B' atz' Sociedad Civil/ワカキバツ市民団 体 (2007 年度 REDCAM コース帰国研修員)

・ 地域会議出席者

No	氏名	所属／職位
----	----	-------

1	ALFARO SANCHEZ Lester Fernando	REDCAM グアテマラ ナショナルコーディネーター Ati't Ala' Association (2009年度 REDCAM コース帰国研修員)
2	VILLATORO Marta del Carmen	REDCAM エルサルバドル ナショナルコーディネーター University of El Salvador (2008年度 REDCAM コース帰国研修員)
3	OCTAVIO GARCÍA VILLARREAL	REDCAM メキシコ ナショナルコーディネーター SEDESOL (2009年度準高級コース帰国研修員)
4	ARRIOLA MAYORGA Alba Suyapa	REDCAM ホンジュラス ナショナルコーディネーター Food Security Enhancement and Risk Reduction for Far Western of Honduras, World Vision (2009年度 REDCAM コース帰国研修員)
5	Nasser Hanoi CARRILLO LARGAESPADA	REDCAM ニカラグア ナショナルコーディネーター Nicaraguan Institute for Agricultural Technology (2006年度 REDCAM コース帰国研修員)
6	VASQUEZ ROSALES Oscar Gerardo	REDCAM コスタリカ ナショナルコーディネーター MAG (2008年度 REDCAM コース帰国研修員)
7	DE LEON CARELA Arelis	REDCAM ドミニカ共和国 ナショナルコーディネーター Centro Zona de Pastoral Social CEZOPAS (2008年度 REDCAM コース帰国研修員)
8	Bolivar Alberto JAEN LARA	REDCAM パナマ ナショナルコーディネーター National environment Authority (2006年度 REDCAM コース帰国研修員)
10	Hugo Solano	JICA エルサルバドル REDCAM 担当ナショナルスタッフ
12	Suyapa Lopez	JICA ホンジュラス REDCAM 担当ナショナルスタッフ
13	Humberto Picado	JICA ニカラグア REDCAM 担当ナショナルスタッフ
15	Mella Laura	JICA ドミニカ共和国 REDCAM 担当ナショナルスタッフ
16	Bonilla Dayan	JICA パナマ REDCAM 担当ナショナルスタッフ

※グアテマラ、コスタリカ担当 JICA ナショナルスタッフは上記参照。メキシコからのナショナルスタッフ参加はなし。

・ 関連機関

No	氏名	所属／職位
1	Ana Rosario Escobar de	SEGEPLAN / Consultora de Promoción y Divulgación

	Canales	Direccion de Apoyo a la Formacion de Recurso Humano
2	Enrique Corral Alomso	FUNDACION GUILLERMO TORIELLO (FGT) / Director General
3	Eduardo Calderón	FUNDACIÓN SIERRA MADRE (SIERRA MADRE 基金) / Director Ejecutivo

(3) メキシコ

・ JICA メキシコ事務所

No	氏名	所属／職位
1	室澤 智史	所長
2	石橋 匡	次長
3	Verduzco Raquel	ナショナルスタッフ
4	Rios Alejandro	ナショナルスタッフ

・ SEDESOL (Mexico city)

No	氏名	所属／職位
1	Pedro Luis López Díaz	SEDESOL / Subdirectora de Coordinación (2007 年度準高級コース帰国研修員)
2	Nancy Nayeli Ortiz Flores	SEDESOL / Subdirectora de Coordinación Interinstitucional (2010 年度地域別研修「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」研修員)

・ SEDESOL (Oaxaca)

No	氏名	所属／職位
1	CASTRO JARQUIN Vicente David	Regional Coordinator of Programs (2007 年度 REDCAM コース帰国研修員)
2	NUNEZ GUTIERREZ Xochil	Regional Supervisor / Micro Regions Oaxaca Branch (2009 年度 REDCAM コース帰国研修員)
3	EDUARDO RODEA REYES	Under Director of Micro Unit / Oaxaca Unit (2009 年度準高級コース帰国研修員)

第2章 調査概要

調査団はコスタリカ、グアテマラにおいて平成22年度「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」コースの在外補完研修に同行した。また、コスタリカ、グアテマラ、メキシコにおいて同コース帰国研修員活動サイト視察、関係機関との協議を行った。またコスタリカ、メキシコにおいて「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」コース準高級帰国研修員との協議を行った。

2-1 コスタリカ

(1) 11月26日（金）

・在外補完研修現地実習（ピエドラス・アスーレス村, Solola）

在外補完研修の一環で日本での学びを現地で実践した。対象コミュニティはMAGがこれから活動開始予定で、導入として日本での生活改善活動の紹介やダイナミカ（学びのある遊び）、問題分析などワークショップが行われた。参加した住民は50名程度で、2グループに分かれてのワークショップとなった。研修員は4班に分かれ、A班、B班がワークショップを実施。C班、D班がそれぞれのサポートと実施後の評価を行った。

会場は教会とコミュニティ集会場であったが、神父を始め参加者は協力的だった。グループ派遣されている4名のSVのうち2名、周辺で活動しているJOCV1名も見学を訪れた。

住民はとうもろこし、豆などを栽培している農家が多く、馬で会場まで来ている者も多かった。都市からは離れた山岳地域ではあったが電線が引かれており、生活インフラはある程度整っていた。

・MAG帰国研修員によるコスタリカ REDCAM 活動発表

北部で活動しているMAG帰国研修員からの希望により、これまでの活動報告（別添資料参照）および今後の方針につき協議した。REDCAM活動の経緯、現在の活動体制、各年の活動内容が詳細にまとめられていた。

これまでの活動の中で普及員は対象住民の変化を確認しており、特に住民の参加を強化する観点で新しいアプローチと認識していた。現在は過去の活動結果を体系化し、ワークショップの方法論をとりまとめている。今後の方向性としては国内全域に広げる方向性は持ちつつも、北部における他の関係機関の巻き込みが不十分であるため、当面は北部への研修員受け入れを希望している。

(2) 11月27日(土)

・帰国研修員活動サイト視察 (AMAGRO)

2010年度研修の在外補完研修の一環として中央部のサイト視察に同行した。JICA 筑波所管「小規模農民支援有機農業技術普及手法」コース(以下、有機農業技術コース)帰国研修員とともに2010年3月より活動を実施している。北部での活動経験を踏まえ、特に導入時におけるワークショップは活動者間で協議の上、独自の内容で実施している。

本サイトの特徴として、生活改善を学んでいないが、生産技術を移転できる帰国研修員と協働していることが挙げられる。また、本邦研修で学んだ内容だけでなく、話し合いの中で考え出された独自の取り組みも実践されている。今後の活動進捗と北部の経験との体系化により、普及員の働きかけの多様化が期待できる。

コーヒー農園や住居改善の視察を通じて、2010年度研修員は周辺住民の経営状況、生活状況と生活改善アプローチへの反応について学びを深めた。

(3) 11月29日(月)

・Ricardo Wong氏(MAG)との協議

MAGにおいて、「農村部生活改善を通じた女性のリーダーシップ育成」コース準高級帰国研修員のRicardo Wong氏とJICA コスタリカ担当者との協議を実施した。浅野団長からのあいさつの後、Ricardo Wong氏よりこれまでのJICAからの協力に対して感謝の辞が述べられた。同氏はSICAが進めるテリトリアル・アプローチによる農村開発戦略の同国担当であり、同アプローチに生活改善アプローチを導入することを考えている。すでに帰国研修員による北部の活動が順調な進展を見せているため、今後は制度的に活動を支援することの必要性が指摘された。北部での活動を全土に広げるものの他、SICAを通じて地域 REDCAMの各国に対して制度的な支援が出来る可能性が述べられた。

・Erick Antonio氏(MAG)表敬

同氏はRicardo Wong氏の上司にあたり、すでに帰国研修員の活動状況および生活改善アプローチの概要について把握している。平成22年度「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」コースで来日予定のため、研修コースの概要説明、日本での滞在について説明を行った。

・在コスタリカ日本大使館表敬

浅野団長より、調査団の目的、日程説明、活動内容等について説明を行った。後藤参事官より、生活改善の成果は政策への反映、大臣級の言及、大臣級の式典への出席などが成果にあたる旨の見解を述べられた。

(4) 11月30日(火)

・Ricardo Montero氏によるSICAおよびCACの説明

在外補完研修に同行し、CAC組織の概要、ECADERTの説明を受けた。コスタリカでは同戦略のテリトリアル・アプローチの一環で、セクター横断の地域開発組織GATを設置しており、他の国も現在形成中との説明を受けた。

・CAC協議

CAC専門家からテリトリアル・アプローチの説明を受けた。日本の普及員の経験として生活改善アプローチの応用可能性を説明したところ、両アプローチが高い親和性を持つとの認識が述べられた。CACはECADERT参加国に対してテリトリアル・アプローチの研修を実施中で、今後はJICAと協力して研修実施したいとの意向が述べられた。

・JICA報告

調査団より同国における調査結果をJICAコスタリカー柳所長に報告した。コスタリカにおいて、REDCAM帰国研修員の主な活動地域付近で農村開発関連分野JOCV隊員が活動しており、SV4名のグループ派遣も11月に着任したばかりである旨説明された。同国での農村開発分野プロジェクトの新規形成は困難であるものの、プロジェクト以外のスキームを含めて継続した支援を検討するとの考えが述べられた。

2-2 グアテマラ

(1) 12月1日(水)

・JICAグアテマラ駐在員事務所との協議

同国におけるJICA事業、特にREDCAM帰国研修員の活動地域に近いプロジェクトについて説明を受けた。現在は地方行政能力向上、農業普及システム構築等がそれに該当するが、かつての構造調整プログラムを経て普及員の数が減少したままであることが指摘された。

(2) 12月2日(木)

・SAGEPLAN表敬

2010年度「生活改善を通じた農村開発」コース研修員へ、浅野団長よりJICA事業、JICA筑波の概要説明を行った。SAGEPLAN担当者より、グアテマラの地方開発を担う開発審議会

制度についての説明、今回の研修参加へ謝意が示された。

・FGT 表敬（2010 年度 REDCAM コース研修員 Blanca 氏所属組織）

Enrique 氏より、同組織がもともとは内戦後の元兵士の社会復帰支援事業から始まったこと、スペイン等のドナーより資金的な支援はあるものの、技術的な支援が不足している旨の現状説明があった。今回の研修参加にあたり、研修員の長期的な雇用保障、REDCAM との協働を約した。女性の手工芸品組合支援をソロラで行っているため、Blanca 氏の帰国後は同サイトで今回学んだ点を導入していく予定である。

・SIERRA MADRE 基金表敬（2010 年度 REDCAM コース研修員 Liliana 氏所属組織）

Eduardo 氏が JICA 事務所へ来訪し、同組織の概要説明を行った。また、Liliana 氏はすでにコミュニティ開発分野の活動を行っているので、研修で学んだことは同活動の向上につながることで、JICA に対しては Liliana 氏が REDCAM 活動をすることで同意していることが述べられた。さらに、Liliana 氏がコーディネーターを務めるパイロットプロジェクト実施のため、来年度予算を確保しているとのことであった。Eduardo 氏自身も 2011 年 1 月の準高級コースで来日予定のため、調査団側からも研修の概要説明を行った。

(3) 12 月 3 日（金）、12 月 4 日（土）

・帰国研修員活動サイト視察（Solola、Totonicapan）

在外補完研修の一環として、合計 4 サイトを視察した。12 月 3 日の 3 サイトは帰国研修員の Ana Elsa 氏、SAMINES DE IBATE Evangelina 氏、Santos Florencio 氏らが活動を紹介した。12 月 4 日のサイトは同 Maria Josefina 氏が紹介した。

3 日の 3 サイトは比較的大手 NGO の Vivamos Mejor 協会（Ana Elsa 氏ら所属 NGO）がスイス等のドナー支援を受けて活動している一方、4 日のサイトは比較的インプットが小さな活動となっている。

(4) 12 月 5 日（日）

・JICA ナショナルスタッフとの協議

調査団より更新案件の概要説明および以下 3 点の必要性を強調した。

- これまでの成果をまとめるための評価
- 地域レベル、国内レベルのネットワークのマネジメント整理
- ネットワーク構築の次のレベルに行くための戦略立案

ナショナルスタッフからは今回のとりまとめ、戦略作成について調査前に実施した TV 会議での説明だけでは十分な理解が得られなかったものの、方向性の共有はできている旨の

確認を得た。

またパイロットプロジェクトの成果を広げる段階にまで達していない国（ドミニカ共和国、エルサルバドル、ホンジュラス）からは、まずは国内ネットワークの強化を進める意向が提示された。またパナマからは地域ネットワークのマネジメント体制構築が大きな課題であることが指摘された。REDCAM の意味や役割の確認が必要であることなど、根本的な課題から JICA 側として共有することができた。

(5) 12月6日（月）

・狐崎団員講義「生活改善アプローチ活動の体系化」

地域会議開始にあたり、ナショナルスタッフおよびナショナルコーディネーターを対象に生活改善アプローチの概要説明および活動の体系化について狐崎教授より講義が行われた。同テーマは前回のパナマでの地域会議でも重要なテーマとされており、日本側有識者によるフレームワークの提示が強く要望されていた。特に REDCAM 活動の相談を受けるナショナルスタッフにとって同内容は喫緊の課題として認識されており、同講義はそのニーズに合致していた。

(6) 12月7日（火）

・更新案件説明、ワークショップ

調査団より、2011 年度から 3 年間の更新予定案件の概要説明を行った。日程や研修対象者等において一部反対意見も見られたが、結果としては同内容に沿って各国の目標を設定することで同意が得られた。

ワークショップでは 2 グループに分かれて生活改善アプローチや REDCAM の意義について議論し、グループごとにまとめて発表した。担当になって日が浅いナショナルスタッフもあり、全体として認識を共有することができた。

(7) 12月8日（水）

・ワークショップおよび各国戦略ドラフト作成

地域ネットワークの運営についてワークショップを実施した。これを踏まえ、下記のとおり幹事国の選挙を行う準備も同時に行った。また、各国に分かれて成果のとりまとめおよび 2013 年度までの各国戦略のドラフト作成を行った。

・地域ネットワーク幹事国選挙

選挙対象国を 1 カ国にするという JICA 筑波案と、サブコーディネーターを含めた複数国

を対象にするという案が出た。結果として投票により前者となった。第 1 回投票は次年度から本邦研修を受け入れないことが決まっているメキシコを除いた 7 各国に対して、各国ナショナルスタッフおよびナショナルコーディネーターの 14 名で投票した。上位 3 か国を選ぶために第 2 回投票で同数 3 位エルサルバドルとグアテマラの 2 カ国で投票を実施した。第 3 回投票で上位 3 カ国を対象に投票を行い、コスタリカが最多得票を得て、幹事国に決定した。これにより、次回の地域会議まではコスタリカが幹事国を務めることとなった。なお、同プロセスは現地コンサルタントの司会で実施され、2010 年度研修員も同席した。

表 1 地域 REDCAM 幹事国選挙の得票数

	第 1 回	第 2 回	第 3 回
コスタリカ	6		7
エルサルバドル	2	8	4
ホンジュラス	3		3
グアテマラ	2	6	
ニカラグア	1		
ドミニカ共和国	0		
パナマ	0		
メキシコ (不参加)			

(8) 12 月 9 日 (木)

・ REDCAM 活動報告および 2010 年度研修員最終報告会

午前中の活動報告会において、8 カ国のナショナルコーディネーターにより 2010 年度の活動内容が発表された。一部の国からはワークショップ中に作成、修正された各国戦略も含めた発表となり、活動共有以上に相互の学び合いの場となった。

午後は 2010 年度 REDCAM コース研修員より、本邦研修を含む振り返りとアクションプランの発表会が実施された。本コースのアクションプランは詳細な計画ではなく、主に応用可能なポイント、展望に絞って発表がなされた。同席したナショナルコーディネーターや JICA ナショナルスタッフからもアドバイスを受けることができた。

(9) 12 月 10 日 (金)

・ 閉講式

グアテマラシティにて、2010 年度 REDCAM コースの閉講式が開催された。佐々木所長の出席も得られ、研修員からは帰国後の活動について抱負が述べられた。式の様子および研修員のグアテマラ訪問は SAGEPLAN ホームページにも紹介され、同国における注目度の高さが

窺われる結果となった。

2-3 メキシコ

(1) 12月12日（日）

・SEDESOL 活動報告

視察先付近のホテルにて、SEDESOL 帰国研修員らによるメキシコの概況、国内3サイトの概要説明および質疑応答がなされた。約10名のSEDESOL関係者が出席し、帰国研修員の同僚の意欲的な活動参加の様子が窺われた。

(2) 12月13日

・サイト視察：女性グループ活動報告

KAIZEN グループリーダーの女性たちにより、活動報告会および現場視察が準備されていた。当日は24グループリーダーのほぼ全員がスペイン語による自己紹介、簡単なグループ紹介を行った。発表の内容としては、鶏小屋建設や洗濯場の改善等、用意していたパネルや活動の成果品を使用して説明した。その後、3集落を訪問して洗濯場、鶏小屋、野菜圃場等の見学を行った。男性のKAIZENグループや女性の家族とのインタビュー時間も設けられた。

(3) 12月14日

・JICA 協議

メキシコ事務所石橋次長らの同席の下で、2010年度「中南米地域 生活改善を通じた農村開発」コース参加者からの発表があった。

PAPROSOC-2のカウンターパートであるSantiago氏より、プロジェクトの成果およびその後の活動状況について説明があった。本邦研修で日本の経験を学ぶだけでなく、同経験を他国からの参加者に共有することも、研修参加の目的の一つであるとの考えが示された。

Nancy氏よりSEDESOLによるパイロットプロジェクト3サイトの説明および提言が発表された。提言の内容としてはREDCAM各国の代表者をメキシコに招聘して、メキシコでの取り組み成果や体系化の成果を発表するというものであった。

第3章 調査結果

3-1 コスタリカ

3-1-1 コスタリカ活動まとめ

(1) REDCAM コスタリカ活動概要

1) 主な活動状況

コスタリカからの研修参加者はほぼすべて MAG から派遣されており、かつ北部地域を業務担当としている。2005 から 2007 年度の帰国研修員は JICA 予算で帰国研修員によるパイロットプロジェクトを実施した後、2008 年度、2009 年度帰国研修員は MAG の予算で活動を実施している。現在は帰国研修員のほか、MAG の同僚や現地の大学、関連行政機関に研修を行い、REDCAM コスタリカのメンバーは 17 名となっている（帰国研修員のうち 2 名は異動等で活動していない）。2008 年より本邦研修を基にした研修を現地で実施し、関係者への普及を図っている。2009 年より本邦研修の在外補完研修受け入れ、2010 年はパラグアイからの研修員受け入れを行った。2010 年より北部地域だけでなく、中央部での活動が開始されている。今回の調査では北部のサイト視察が出来なかったため、北部活動の内容は研修員からの発表による。

2) テリトリアル・アプローチ

Ricardo Wong 氏が推進しているテリトリアル・アプローチに従い、活動を進めている。コスタリカには 4 つのテリトリーが設定され、各テリトリーには GAT が設置されている。GAT はテリトリーの開発を進めるためのマルチセクターな組織で、MAG のみならず、保健省等の他の行政機関、大学、市役所などの参加の下で総合的な地域開発を行うための機関である。すでに北部地域からは保健省の GAT メンバーも研修員として来日しており、協働が始まっている。しかし現状としては MAG 以外の機関への巻き込みが十分ではないため、今後さらに北部地域での GAT 活動を充実させ、将来的にはほかの地域に展開していく予定である。特に Ricardo Wong 氏は全国展開を推進しようと考えているが、北部地域の RED メンバーは、北部の活動強化がまだ必要であることを強く主張している。

3) マニュアル化の取り組み

2008 年に本邦研修の教材を基に、普及員活動の各ステップの内容を決めて、マニュアル化に取り組んでいる。初年度に北部の La virgen で実施した内容はワークショップを 5 段階に設定し、その後はフォローアップという構成だった。その後、2009 年に評価を行い、

2010年に同マニュアルの内容を改善した。ワークショップは6段階のレベルに設定し直し、北部地域では2週間に一度ワークショップを実践した。すでに同内容で7か月分のプログラムが終わり、レベル2が終わった。詳細なマニュアルは講師用、対象者用を別に作成しており、2011年3月ごろに最終版をまとめる予定である。

(2) 北部地域活動

1) 対象地域の概要

支援対象グループはもともと婦人会、自治会や生産者組合は存在していたが、設立目的は必ずしも明確ではなく、活動は活発ではなかった。北部のうち、Upala地域は帰国研修員3名で実施。活動のための予算は現在特に組織から特別には支払われてはいないが、通常業務程度の車両やPCの使用、NGOなど他の機関との連絡調整等の組織的な支援がされている。

2) 活動の内容

住民主導の活動で、プロジェクトとして予算はつけない。既存の住民グループから25名のリーダーを招いて研修を実施した。研修はPDRの通常予算から行うため、1年間に3、4回程度の活動中で、研修の主な内容は参加型問題分析、地域分析、SWOTなどのツールの実習である。リーダーは研修後、学んだ内容を各グループで共有・実践する。上記のとおり、同研修内容はマニュアル化が進められている。

3) 活動によって起こった変化と今後の展望

A) 住民の変化

帰国研修員からは、「以前は援助に依存していて、(住民は)自分の頭で考えなかった。今は自分で中身を考えるようになった。」「パイロットプロジェクトのサイト視察受け入れをさせると、変化がわかる。以前は人前で話さなかった女性が話すようになった。」といった意見が述べられた。

研修を受けたグループは自分たちで計画を立案し、活動を実施するまでになっており、活動内容としては、農産物加工、ツーリズムなどがある。子どもたちのために寄付金集め活動を行い、ユニフォームを作ったグループもある。

B) 普及員業務の変化

「普及員の業務内容は技術支援や展示圃場の設置(という認識)であった。住民グループを組織化して開発に取り組む視点はなく、弱点であった。」「前は物を渡すだけだったが、現在は住民を参加させる。」といった、参加型農村開発に取り組むようになったことが変化と言える。さらに「ほかの機関との調整ができるようになった。」「地域資源を使う、小さいことから大きくしていく。1つ変えたらどんどん新しいものが出てくる。」「ヒトを大切に。自分が考えないと、ほかの人に支援できない。」といった生活改善アプローチのさ

さまざまな要素が帰国研修員ら自身の変化として認識されている。

C) 今後の展望

現在、一部の大学や市、保健省と GAT を通じて協働しているものの、MAG のように意思決定レベルから現場の普及員レベルまで縦のつながりは形成されていない。今後は MAG 以外の機関ですでに活動を始めているファシリテーターを研修員として本邦に派遣していく予定である。同活動実施にあたり、JICA に対してパイロットプロジェクト実施のための予算支援の要望があった。また、ほかの機関を巻き込むために日本人専門家によるセミナーは有効であるとの意見もあった。

3-1-2 AMAGRO

(1) 対象サイトの概要

1980 年代に農業企画庁から土地を貸与されている。現在も個人所有ではない。コーヒーの値段下落により土地を離れる人々が多く、現在はコミュニティに 7 家族になった。2004 年から AMAGRO としてグループ化して協働している。帰国研修員の活動前からコミュニティ活動はされており、男女で役割分担している。

(2) 実施体制

Anabelle 氏 (2008 年度帰国研修員、有機農業技術コース)、Alex Alberto 氏 (2010 年度帰国研修員、有機農業技術コース)、Vera Varela 氏 (2009 年度帰国研修員、REDCAM コース) の 3 名で実施している。2010 年 3 月から、コミュニティの要求に基づき、毎月 2 回 13:00-16:00 で訪問している。Anabelle 氏と Vera 氏は毎週、Alex Alberto 氏は 2 週間に一度協議する。それとは別に月に 2 回のサイト訪問がある。

同地域には GAT が形成されており、会議も定期的の実施中である。Vera 氏が国全体担当、Anabelle 氏が地域全体担当、Alex Alberto 氏は当該地域担当として活動調整を行っている。他、観光関連の NGO 等の MAG 以外の関係者も参加している。

(3) 普及活動の経緯

1) サイト選定理由

僻地にあるため支援が少ないこと、女性の活動が活発であったことが挙げられた。当初は女性だけの活動とする予定だったが、女性たちから男性も活動に入れるよう要望があったため、コミュニティ全体での活動を支援している。来日前に 3 名で本邦研修後のアクションプラン作成にあたって話し合っており、この時点で対象サイトは決定していた。

Vera 氏が事前サイト視察した際、汚水処理の必要性が高いと認識していた。MAG 側に環

環境保全の計画はあるが、コミュニティの自主性を尊重するため、住民に活動希望を聞いて環境分野については現在も検討中である。最終的にはパナマ¹でのアクションプラン作成後、Ricardo Wong 氏の承認を得てパイロットプロジェクトとして実施した。

2) 活動の経緯

北部のサイトでは最初に日本の生活改善アプローチを理解させるための研修を実施しているが、AMAGRO では住民が最初から理解することは困難と判断した。住民が少しずつ理解できるように、一度に教えることはなく、徐々に理解してもらうよう努めた。

最初は「日本の経験」として、生活改良普及員の働きやその結果を発表したところ、台所の改善など自分たちにもできる活動として認識され、好反応を得たとのことである。各ワークショップの後に振り返りを行い、簡単なアンケート・宿題（「生活改善とは何か？」など）も課した。アンケート結果では「家族の日常生活を良くしていくこと」「自分たちのものの考え方を変えること」、などの回答を得た。徐々に改善プロジェクトの話に移り、「自分たちにとっての改善事項」、「プロジェクトのテーマ」を問いかけたところ、「やせたい、健康、自信を持ちたい」、「人前で自分の意見が言えるようになりたい」等の回答があった。テーマは「栄養改善、自己啓発」が挙げられた。この際、「汚水処理」は住民の認識として大きな問題ではなかった。2010年5月から個人的な夢、外部要因、内部要因の分析を2,3回に分けてワークショップを実施した。

(4) コミュニティのプロジェクト

AMAGRO コミュニティでは住人が退去した家を集会場として利用していた。住民によると、以前は集会場のことを気にしていなかったが、ワークショップの中で利活用のための修繕が提案され、コミュニティの資金でトイレを修理した。今後は横の空き地を公園にして交流の場にしていくことを検討中である。

発電所を域内に持つ電気会社の協力で、トイレや排水のパイプ、排水ろ過装置の設置支援の可能性もある。2010年11月に同社の専門家が装置の設置場所調査に来ており、こちらも検討中である。このほか、村の特産品であるマカデミアナッツ加工の作業改善、現在は自給利用している牛乳の加工・販売、さらにコーヒー生産の技術改善がプロジェクト候補として挙げられている。

(5) 女性 A の活動

帰国研修員によるワークショップにより、コミュニティの女性が自主的な活動を始めた。調査団訪問時には彼女が主に活動の紹介を行った。

¹ 2009年度「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」コースの在外補完研修がパナマで実施され、研修成果品としてアクションプランが作成された。

1) 住居改善

帰国研修員によるワークショップを通じて日本の経験を知ることで、同様の活動が自分にも出来ることに気づいた。特に帰国研修員と相談もせず出来ることは自主的に進められた。具体的には、土床をコンクリートで固めたこと、床にあった流しを家の中で台にしたこと、カマドに煙突設置したことなどで、経費の支援等はないため、材料費は女性 A が自分で捻出した。

2) 帰国研修員ワークショップの影響

活動計画を考えるワークショップが行われ、最初は美容院経営と 5 年前に中断した勉強の再開の 2 つを考え、コミュニティ内で発表した。他のメンバーから美容院は顧客が近くにいないことを指摘されたため、再検討して勉強の再開を計画した (Colegio²の卒業を目指す)。将来的には母親のマカデミアナツツの加工作業を手伝うことや、ほかの仕事に就くことを想定している。

ワークショップの中で、「何をしたいか」「なぜしたいのか」を書くセッションがあり、「人生でやり残していること」を考えるよう促された。将来は子どもの教育資金を稼ぐため、仕事に就く必要がある。そのためには Colegio の卒業資格をとりたいと考えるようになり、勉強を再開することになった。これまでもワークショップは経験したことがあるが、技術を学ぶためのものだけであったため、自分の人生について深く考える機会としては初めてだった。

(6) 今後の展望

北部の先行地域に比べ、AMAGRO の中部 GAT 地域は 2010 年 3 月からの活動開始であり、REDCAM コース帰国研修員という観点ではわずか 1 名である。MAG としては生活改善活動をテリトリアル・アプローチに含まれる形で全国展開する予定で、北部の経験を他の地域にも移転する意味で重要な位置づけとなっている。非常に小規模のコミュニティを対象としているものの、住民の自主的活動は帰国研修員の想定を上回る速さで進んでいる。これまでは個人レベルの活動が主体であったため、今後はグループレベルに活動を広げていくことが課題³。帰国研修員は可能であれば今後は IDA からコミュニティプロジェクトへの資金的な支援も考えている。

今後は GAT を通じて市役所など他の機関との連携も進め、活動の面的拡大を図る。また、現在は MAG 内のパイロットプロジェクトとしての位置づけであるが、政策的な反映により、自分たちの活動が継続的に認められるような働きかけも希望している。JICA 本邦研修への研修員派遣も今後は南部からの人選が中心となる予定。

² コスタリカの教育システムでは、小学校 6 年、中学高校 (Colegio) 5 年、大学 5 年となっており、遠隔地ではテレビを活用した通信教育によってコレヒオの卒業学位取得が可能。

³ 生活改善グループの活動レベルは個人活動、グループ活動、社会活動と 3 段階の発展があるとされる。

3-2 グアテマラ

3-2-1 サイト① Nahuala, Sololá

(1) サイト概要

マヤ族のキチェ語圏に属し、住民の 95%はスペイン語を解さない。土地はコミュニティレベルで管理され、家族毎に割当てている。主要農産物はとうもろこし、インゲン豆で、ほとんどが自給用である。その他、家庭内または小規模工場での織物生産が主要産業である。

主な問題としては、村には北米での道路建設などの出稼ぎ労働者が多く、そのため格差が生まれ、コミュニティの結束に負の影響を及ぼしているケースがある。また、台風、傾斜地域、粗放的な農業が要因となり、土壌流出等のリスクが大きな問題になっている。

外部からの支援はコミュニティセンターを拠点に Vivamos Mejor 協会が中心となって活動を実施し、保健省と保健・教育・栄養・リスク管理の分野で契約を結び協力している。

行政構造としては、村長の下に開発や保健等の各委員会が設置されており、COCODE（コミュニティレベルの開発審議会）と連携している。各集落レベルにはコミュニティのリーダーがおり、Vivamos Mejor 協会は彼らを集めて研修を実施している。行政からの支援金はコミュニティの委員会と同協会が協力して基金を管理し、センター設立や薬局運営などの保健活動を行っている。このコミュニティ薬局に 2011 年 1 月から医師、看護師、教育担当官がくる予定で、これまでは 10 時間かけて馬に乗せて病院に輸送していたコミュニティもあるが、状況が改善されることが期待されている。

(2) 活動内容

2008 年から Vivamos Mejor 協会の支援による生活改善および流域管理（環境保全）活動を実施している。生活改善は保健分野と栄養・農業生産分野の活動が主軸となっており、その中で従来からコミュニティで活動していた助産婦は保健ファシリテーターとして協働している。流域管理は現在活動の計画段階にあり、周辺環境調査を実施中である。活動開始当初は環境点検マップ、一日の生活、農家カレンダー、未来図、ベン図など、生活改善アプローチや PRA のツールを使ってワークショップを実施した。グループでの問題分析の中で、特に環境・保健のリスク管理が住民にとっての共通の問題意識として醸成された。その後、帰国研修員らとともに各種委員会を設置し、コミュニティごとに資金の積み立て、管理を行っている。

住民活動として、保健分野では、緊急委員会が設置され、各コミュニティで積み立てた資金を使って病院に行く際の費用を支弁することになっている。村民の急病や出産の際には Totonicapan の病院に輸送する（一部のコミュニティは輸送用の車両がある）。また、同様のファンドで現在小橋梁を建設している。市に申請しても着工までに時間がかかるため、

コミュニティの中で資金を工面することとなった。資金は任意の支出であり、余裕のない住民は状況に応じて額が異なり、労働力も住民（男性）による。

（3）変化と今後の展望

帰国研修員によると、参加型農村調査手法は以前から実施していたものの、コスタリカや群馬での JICA 研修を通じて、地域資源の活用、らせんのグループ成長プロセス⁴等の新たな考え方を取り入れた。帰国後の活動から住民と一緒に計画を始めた。一緒に作ることで主体性が醸成されるとのことであった。帰国研修員はこの活動を通じて、組織化の重要性に対する認識、主体性などの面で住民の意識が少しずつ変わってきているように感じている。

保健・公衆衛生分野についてこれまで研修はなかったが、帰国研修員らによってリーダー研修を実施し、受講したリーダーが各コミュニティで知識を広めた。多い場合には一人の女性が 12 人の子どもを産むような伝統的家族観があったが、家族計画を少しずつ受け入れているとのことである。コミュニティにおける変化としては、組織化して病院に行けるようになったことが大きいものと認識されている。活動前は 1 年で 3、4 人が病院に行けず、死亡する妊婦がいた。またそれ以前の問題として、病院への信頼がなかったことも医療を受けなかった理由として挙げられる。住民は研修を通じて応急処置を学び、近代医療を信頼し始めるようになってきている、と帰国研修員らは感じている。

ジェンダーに考慮して、研修は主に女性を対象にしている。女性は研修へ参加するものの、コミュニティの意思決定のプロセスにはなかなか入り込めていない。女性の地位向上の観点で進捗はあるが、十分な状態ではないとの認識がされていた。

今後はジェンダーの観点で女性のリーダーが増えることが期待されている。また流域管理のプロジェクトの調査を進め、具体的な活動計画を作成することも現在の課題として取り組まれている。

3-2-2 サイト②（パチュキキン・コミュニティ）Nahuala, Sololá

（1）サイト概要および活動内容

Vivamos Mejor 協会により、2009 年 10 月から活動が開始されている。成果を出すために、複数の活動で同一組織（CEIBI⁵に所属している保護者）を対象に行っている。活動開始時に

⁴ 本邦研修の東京大学太田美帆氏の講義において、研修員は生活改善グループの成長プロセスモデルを学んでいる。この中で、活動の段階は「個人活動、グループ活動、社会活動」の 3 つの段階があり、その成長過程では活動が進展する時期と停滞する時期がありながらも、中長期的に見ると段階が進んでいくという点が指摘されている。

⁵ 小学校前（3-6 歳）の児童のための、異文化理解や言語教育を実施している。児童の保護者が運営委員会を組織しており、共同で昼食作り等の活動も行っている。このコミュニティでは訪

帰国研修員と住民の協働で調査を行い、優先順位を決めた。希望内容としては保健分野での研修実施が挙げられた。

また帰国研修員の一人である Ana Elsa 氏によると、ここでは活動前はカマドが非効率だったため、優先課題とされた。屋内にあるカマドは周辺の森林伐採や子どもの気管支炎の原因であったとみられている。このため Vivamos Mejor 協会がレンガと鉄板を供与し、住民に技術支援を行った。それを受けて、CEIBI の保護者とその家族が自ら改良カマドを設置した。

(2) 変化と今後の展望

「活動を始めて、家に籠りがちだった女性たちが外に出てくるようになった」等の変化が見られるが、Vivamos Mejor 協会のドナーであるスイスの基金からは成果を測る指標が求められ、それに対応する形で評価方法を検討してきている。評価は Vivamos Mejor 協会と参加者の双方により毎年実施されている。識字率等のグループによる違いも考慮しつつ、以下の3つの視点で評価している。

- グループの女性の何%がアクティブに参加しているか。出席や発言数で評価。
- 衛生行動についてのチェックリストを作成し、各項目の実施率で評価。
- 栄養分野では料理での野菜の使用頻度等で評価。

今後の展開として、帰国研修員は以下のように述べている。「食の安全（保健）、教育など基礎的なテーマで研修を実施すると、住民のリスクへの意識が高まる。リスクについての議論の中で、地域環境との結びつきがわかるので、その後に環境のプログラムへ移行することができる。」

3-2-3 サイト③（チキシ・コミュニティ）Nahuala, Sololá

(1) サイト概要

サイト②と同様、Vivamos Mejor 協会により CEIBI の保護者がグループを組織し、帰国研修員らの支援の下で活動を実施している。Vivamos Mejor 協会のプログラムコーディネーターが責任者となり、通訳（先住民言語）・料理方法担当の女性普及員と男性の農業技術者が協働している。

(2) 活動内容

以前からあった野菜栽培ビニールハウスを修繕して活動している。MAGA の台風被災復興支援事業のなかで建設されたもので、修繕したもの以外にもハウスは多く設置されたが、

間時 23 人の保護者で構成されている。

フォローアップ事業がないために放置されているとのことであった。このサイトでは Vivamos Mejor 協会がフォローアップを行い、順調に活動が進捗しているため、ハウスを一つ増やす予定としている。この地域は 11 月～3 月の冬季は霜が降りるために農業ができないが、ハウス栽培では栽培期間が延ばすことができる。

栽培している作物は主に従来は市場で購入した野菜（人参、キャベツ、玉ねぎなど）となっている。インゲン豆や菜っ葉の種は自家採種しているが、他の作物は同協会の資金で苗木を買ってきている。初年度は農業技術をもつ普及員が栽培指導を行った。2 年目は住民にも栽培の経験があるため、資材の供与のみで、日常の指導は行わずにモニタリングする予定である。また、収穫した野菜および周囲の未利用果樹・野菜の調理研修も実施している。

（3）変化と今後の展望

1) コミュニティ

CEIBI の女性からは、「以前は女性組織を作る自由がなかったが、組織化によって色々なことができるようになった。」とのコメントがあり、これまで抑圧されてきた女性の地位向上に貢献している可能性が指摘できる。

また、野菜栽培および料理研修の結果については、「料理研修のおかげで家でもレパートリーが増え、料理が家族に気に入られるとうれしい。」「周辺で自生している菜っ葉が栄養になる。食物が減る 10 月以降でも手に入る。」と、食糧確保、栄養面でも好影響が出ているものと推察される。

帰国研修員らの働きかけで地域資源の利用の観点で調査を行った結果、「サウコの実」という果樹が利用できることがわかった。「今までは鳥が食べるだけで、食べたこともなかった。実は食べることも出来るし、葉は有機肥料の原料になる。研修によってジャムの作り方を学んだ。子どもたちが喜ぶ。」との意見もあった。

2) 帰国研修員

帰国研修員によると、「まずは住民を集めてワークショップを行い、小さいものからスタートする」という生活改善アプローチの基本的な姿勢で活動をしてきた。一方、先住民地域の特に環境の悪いサイトであるため、「インプットしながら実践してみる。これはお金をかけた改善であり、今のところイニシアティブは援助者にある。その後で徐々にグループの能力が向上し、主体者意識が発現してくるはず。」という方針の下で活動が行われている。

評価の課題として、Vivamos Mejor 協会のドナーは、経済的效果が現れないことを理由に、ビニールハウス野菜栽培には追加投資しないとの立場であったが、帰国研修員が交渉して承認を得たという経緯がある。帰国研修員間には経済効果以外にも重要なものがあるという認識があるが、この成果をどのようにドナーに認めてもらうかは今後の課題として残る。

3-2-4 サイト④ Totonicapán 周辺

(1) サイト概要

サイト①～③に比べて規模が小さく、同様に山岳地帯に位置している。4年前に組織した住民委員会のメンバー約30名を中心に活動を実施しており、組織は委員長、副委員長、書記、会計、他の2名の役員で構成される。2007年度 REDCAM コース帰国研修員の Josefina 氏が支援を行っている。

(2) 活動内容

1) 活動開始経緯

グループの長によると、中学校建設の申請をしたが、組織がないと何も出来ないということがわかった。そのため、数人の有志の呼びかけで組織を結成し、市役所にグループを登記してワカキバツ市民団体 (Josefina 氏が所属していた組織) に協力を依頼した。同氏は始め中学校建設で声をかけられたが、住民に協力できる内容は研修の実施であるとして、ワカキバツ市民団体の研修メニューリストを渡した。住民がその中から「自己の尊厳」、「エイズ・性病」、「有機農法」、「雨水管理」、「トイレ」等の研修を選択した。

2) 生活改善ワークショップの開始

Josefina 氏は以前から研修は実施していたが、農業、薬草、栄養、農業生産等の個別テーマの研修を独立して実施していて、特に生産性向上に重点を置いていた。本邦研修を踏まえ、それぞれのテーマを生活改善の中に体系立てた。それによって、農業生産以外にも重要なものがあるということがより明確になったとのことであった。

同サイトで研修を始めるにあたり、事務所の運営委員会を中心に生活改善の説明を実施し、当初は衛生 (ゴミ集め)、保健・栄養の活動から始めた。その後開催したワークショップにおいてコミュニティ内で必要な活動を検討した結果、野菜栽培が挙がり、本格的な活動が始まった。ワークショップの内容については、Josefina 氏によると「20%が理論の講義、80%は実践としている。この後で住民に課題を出し、(野菜栽培であれば) どの面積でどこまでやりたいのか、彼ら自身に決めてもらっている。」「経済ではない見方が重要。お金のいらぬプロジェクトはどうやったらできるのか、住民に問うている。」

3) 保健・栄養活動

ワークショップの中で、地域資源を利用した調理法や薬草利用の研修希望があった。Josefina 氏は家庭科教師経験があり、周辺で自生している野草の調理法の研修を実施できた。また、コミュニティ内での聞き取り調査 (疾病や服用薬の種類) に基づき、薬草利用の方法を共有した。

住居改善として、改良カマドを所有していない住民でグループを形成し、設置のための

支援を行った。カマドの位置を高くすること、排煙設備の設置等により、健康・衛生面の効果が期待される。

4) 野菜栽培活動

グループ参加者によると、「ワークショップにおいて栄養改善をテーマに考えたときに、農業生産とのつながりが重要ということになった。」ため、同活動の生産物は主に自給用に消費されるが、一部は販売もしている。作物はトマト、たまねぎ、カリフラワー、ブロッコリー等の野菜のほか、大豆、黄桃、オレンジも育てている。

Josefina 氏らの研修によって有機肥料の有効性が紹介され、カシの葉の腐葉土や家畜の糞や人尿を入れていた肥料生産を行っている。当初は 30 家族を対象に始めていたが、少しずつ適用している農家が増えてきている。同様に害虫対策として尿、にんにく、野草、石灰などを原料とした殺虫剤も自家生産している。

栽培用の種子および苗木は市民団体より提供されている。住民によると、「種はそこまで高くないが、家庭によっては購入が困難な場合もある。またコミュニティは幹線道路から距離があるので、種を購入するための交通費もかかる。」。また同じワカキバツ市民団体より材料供与と技術研修支援を受け、約 80 リットルの雨水が溜められる貯水槽も設置している農家もある。

(3) 変化と今後の展望

住民組織は 4 年前に 17 家族で開始し、視察時は 35 家族に拡大していた。活動内容はごみ拾いなどお金をかけない改善から始め、ワカキバツ市民団体のほか、行政機関の支援により野菜栽培を中心に発展してきている。多くの農家が主食のとうもろこしを自給できるのは 2~3 ヶ月分程度で残りは購入している一方、組織活動を実施している農家は生産性の向上、保管庫の改善により、4~5 ヶ月分程度の自給が出来るようになったとのことである。組織のリーダーによると、「研修や情報提供が外部から必要な支援」である。現状ではモチベーションが高い農家が各戸単位で活動をしているが、他の住民にも紹介してグループ生産も視野に入れて拡大していくこと、ビニールハウスを設置して、周辺住民にも収穫物を配分できることを目標としている。

Josefina 氏によると、「まずは（苗木、資材、技術等の支援の下で）住民たちが野菜の栽培方法を学び、育てる技術を習得する必要がある。その後で家庭内で継続できるサイクルを作り上げることを目指している。」という点でサイト③の活動方針と共通している。加えて、一部の住民は栽培している野菜を常食していないことから、「まずは食べることに慣れることが必要」としている。種子・苗木の支援は今後も一定期間は継続していく必要はあるが、ソラマメ、ダイズについては自家採種自給がすでに一部行われている。

これまでの活動の中では特に調理法研修への住民の反応が良く、一つの研修が終わると

別の研修のニーズが次々と出てくるようになったということであった。現在のところは中核的な組織のリーダーがパイロット的に活動を進めているが、彼らの意識変化、成果の普及によって、活動がより面的に拡大していくことが期待される。

3-3 メキシコ

3-3-1 メキシコ活動のまとめ・背景

メキシコは REDCAM コース第二フェーズ（2008-2010）からの参加である。研修参加前に JICA メキシコ事務所と SEDESOL との間で、研修参加の代わりに帰国研修員が国内 3 ヶ所でパイロットプロジェクトを実施することが約されていた。これに基づき、準高級コースを含む SEDESOL 所属の帰国研修員およびその同僚によってパイロットプロジェクトが実施されている。パイロットプロジェクトは基本的にコミュニティへの活動支援金は供与しておらず、通常普及員が業務で使用できる機材貸与等が SEDESOL からの支援となっている。パイロットプロジェクト 3 サイト間では情報共有を行っているものの、現状では政策への反映、予算措置、全国レベルでのネットワークは整備されていない。

なお、メキシコは Oportunidad プログラム（社会開発分野の条件付現金給付）等の現金給付支援が農村開発政策の中心となっており、普及員の基本的な業務もこの政策履行が多くを占める。

3-3-2 サイト視察 Santa Lucia Miahuatlan

（1）サイトの概要、実施体制

オアハカ州はメキシコ国内では特に貧困度が高い州となっており、対象サイトはグアテマラ同様に先住民族（サポテコ族）の居住地である。パイロットプロジェクトは 2009 年 7 月から上述のコミットメントによりスタートした。合計約 260 名による 24 の女性 KAIZEN グループ、加えて 2 つの男性グループを形成している。コミュニティには「テキオ(Tequio)⁶」と呼ばれる集団労働の先住民文化習慣があり、この一環として KAIZEN グループの活動が位置づけられている。

SEDESOL のほかに保健省の支援も入っており、現場では省の末端組織である保健ユニットの研修施設を KAIZEN グループのミーティングに使用するなど、協力関係にある。保健ユニットによる啓発活動は 20 年以上前から実施されてきており、保健衛生分野の研修機会を提供している。

（2）活動の内容

・ワークショップの実施

帰国研修員らの SEDESOL 関係者は活動開始まで 8 回のワークショップ（下の 1. ～ 5. 一部は複数回）を実施した。各回 200 名程度の参加が得られた。その後は 2 グループ対象

⁶土日のどちらかでコミュニティのための活動を行う、先住民地域の慣習・ルール。サポテコ族に限らない。学校の修繕や水の導水、道路の修繕など、平日は農作業を行っている男性の仕事。

など個別のワークショップも実施している。

初期のワークショップにおいて、帰国研修員らが村の将来について女性、若者、子どもが意見を出し合った。大人に対しては、ディスカッション形式で SEDESOL の普及員が書き取りをした。4～12 才の子どもに対しては絵で 10～20 年後の将来を描いてもらった。この取り組みの中で空き瓶などゴミが多いこと、解決策としての分別が指摘され、カゴ編み活動と編んだカゴによるゴミ分別が実施されるようになった。また煙の充満解消にむけた住居の問題も提起されたが、これは現在活動検討中である。

表 2 実施済みワークショップ（2009 年 7 月～2010 年 12 月）

<ol style="list-style-type: none">1. 生活改善に関する情報提供2. 問題分析3. KAIZEN グループ形成（23 グループ結成。1 つは後で追加。） →生活改善委員会設立4. 計画策定5. 活動の開始（多くは洗濯場の改善を洗濯）<ul style="list-style-type: none">● 活動発表会● 「自分の一日」発表会（問題分析的な効果？）● 2 つ目の活動内容を検討：グループから「カマド改善」の提案● 生活改善委員会で検討、実施の決定● 3 種類のカマド設計図を作成中

・生活改善委員会の設立

SEDESOL と女性グループとのコミュニケーションのためにグループ代表者 24 名からなる生活改善委員会を設立（グループ形成ワークショップ直後に設立。SEDESOL と住民により立ち上げ。）した。予算措置等はなく、SEDESOL はメンバーに含まれていない。SEDESOL からの情報伝達の受け皿として、必要であれば SEDESOL が集合を要求することもある。グループ活動内容についての検討協議、市当局との折衝などの役割も果たすようになった。

・KAIZEN グループ活動概要

表3の活動以外にも、薪集めなど日常作業を共同で行っている。それぞれの活動はグループ毎で決められるが、洗濯場の改善、カゴ編み、刺繍活動はほぼ全てのグループで行われている。

表3 KAIZEN グループ活動概要

活動名	活動概要	住民（帰国研修員）からのコメント
洗濯場の改善	<ul style="list-style-type: none"> ●洗濯場のための簡易な小屋を設置した。多くのKAIZENグループにとって組織化後で最初の活動となった。 ●建設用の資機材は家の近くにあるもの（自生している植物等）を利用しているが、金属製の洗濯台だけは購入し、購入資金がない家はグループで補助した。建設の労働力は女性グループの夫や子どもの協力によって賄われた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●以前は石の上で洗濯していたが、壁や屋根を設置したことにより、日光や風（寒さ）をしのげるようになった。雨の日や夜間にも洗濯できる。 ●台を設置したことにより、腰の高さで作業ができて楽になった。ただし、外が暖かい日には外で洗濯している。
カゴ編み	<ul style="list-style-type: none"> ●衣類やとうもろこしなどを収納するための伝統的なカゴ作りを始め、現在ではゴミ箱にも利用している。このカゴでゴミを分別し、ジュースのビンなどを業者に売る計画を立てている。 ●以前は男性しか作っていなかったが、男性やメンバーの一人である小学校の先生から編み方を指導してもらった。 ●グループの多くは作らずに購入していた。カゴを編みながら、村の問題解決について話し合っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ゴミ箱を買わずに済むようになった。 ●籠を作りながらの話し合いは日常生活からの解放で楽しい。 ●購入していたカゴを安価に自給できるようになった。 ●カゴを編みながら、あるいは刺繍をしながらなど、作業をしながら話し合っている。（帰国研修員）
刺繍（クロスステッチ）	<ul style="list-style-type: none"> ●トルティージャの保存用に用いる布に刺繍を施す。一部は販売して材料費に充てる。デザインは各自考案したものや、市販のものをコピーしたものなど多様な作品がある。 ●村の年配の女性や詳しい方に編み方を教えてもらっている。家事を 	<ul style="list-style-type: none"> ●先住民の伝統を取り戻す意味もある。 ●年配の女性との交流は今まであまりなかった。 ●みんなで決めたことなので大変だが頑張れる。出来たものを見せ合うことも楽しい。

	<p>終えた夜間に練習し、大きいものになると製作期間は約 1 ヶ月かかる。</p>	
<p>鶏小屋建設、薪小屋建設</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 鶏小屋の金網は家にあって使っていなかったものなど、身近な資材を利用している。薪小屋も雨を避けるためだけの簡素なものである。 ● 洗濯場と同様に、購入資金がない家はグループで補助した。建設の労働は旦那や子どもたちが協力した。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 以前は放し飼いにしていたため、鷹に襲われること、寒さで死ぬことがあった。 ● 鶏はこれまで（盗みと思われる）行方不明になることがあった。囲いがないので他の家に行ってしまった。 ● 濡れていると煙が多く健康に悪いので雨を避けるための小屋が必要ということになった。乾燥した状態を保つため、みんなで協力して建設した。
<p>家庭菜園</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 施肥などの手入れはグループ全員で行う。現在は 4 グループで菜園をやっている。視察先では初年度の生産物は各家庭で消費した。種子はグループメンバーでお金を出し合って購入している。余った生産物は販売し、一部は種子代に充てている。 ● 人参、カブ、青菜、いちご、ネギなど、これまで市場で購入していたが、栽培はしていなかった作物を栽培している。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 子どもの栄養改善のために始めた。 ● 余ったものは販売して 1500 ペソ（1 ペソ＝約 7 円）になったのでグループで分けた。 ● 野菜や料理の種類が増え、その結果旦那も力仕事に手伝ってくれるようになった。

(3) 変化と今後の展望

1) コミュニティの変化

女性グループはワークショップ後、すぐに活動を開始した。女性たちの活動の動機について、SEDESOL 関係者内で以下の見解がある。「今は何ももらえないが、今後 SEDESOL から何かもらえることを期待しているかもしれない。」という懸念はあるものの、「ワークショップで金銭的支援がないことは何度も説明している。『自分たちでも何かできるという気付きを得た』と話した女性もおり、女性たちがこの自信を得たことが大きい。女性たちの自信は、ワークショップ中の問題分析・計画策定および洗濯場の改善活動を通じて徐々に形成されたのではないか。」という旨のコメントを多く聞くことができた。サイト訪問時にも女性グループメンバーから直接「やろうと思えばできる、ということがわかってきた。」「何人か活動を辞めたが、活動は今後も活動は継続していきたい。」といった肯定的なコメントが得られた。特にグループの活動が男性や家族にも理解を得ており、男性の KAIZEN グループも 2 グループが結成されている。

また、サイト訪問時、村議会の第二書記に KAIZEN グループの女性が推されていたが、第一書記が女性の就任に反対しているとのことであった。特に同サイトのような山岳地域では女性が議会役員に就任することはまれであるため、女性のエンパワーメントの観点から、男性の理解を一層得るという課題は残るものの今後に期待ができる状況にある。

2) 普及員の変化

SEDESOL 関係者は月に二回、土日にコミュニティを訪問している。帰国研修員以外にもモチベーションを持って働いている普及員が育成されていることは、活動の継続性、現地への定着において非常に重要である。

「かつては収入向上のためのプロジェクトが主流だった。確かに収入は向上したが、治安の悪化など社会問題が大きくなった。お金だけではうまくいかない。」という問題意識に対して、生活改善活動が一つの回答と認識されている。「今までの参加型開発は外部からプロジェクトを持ち込んでいたが、生活改善アプローチは住民たちに考えさせるプロセスがある。グループ活動は今までも行ってきたが、利益は 2, 3 人だけが享受していた。グループ全員の活動にはなっていなかった。」という点において、コミュニティにプロモーターとして接近し、何度も現場に出向く中で、住民の主体性が高まっていることが確認されている。この点も関係者の普及活動の動機になっているものと思われる。

一方で、このアプローチそのものが彼らにとって全く新しいものではない。「まずはコミュニティの声を聴く」と SEDESOL の行動原則にも明記されており、彼らの認識としては「原点回帰」である。

3) 今後の課題と展望

KAIZEN グループの活動評価は、これまでのところは取り組めていない。SEDESOL 関係者

内では、生活改善アプローチを参考に、グループメンバー自身に評価をさせることが検討されている。活動の内容そのものに関してはこれまで通り KAIZEN グループの主体性に任せるが、当面は「お金のかからない改善」としている。Eduardo 氏によると、彼らはグループの発展を2つの段階で分けて考えている。第一フェーズは「お金をかけない改善活動」に特化し、第二フェーズで「お金をかけた改善活動」に移行する予定である。なぜなら、「お金をかける改善」はこれまでの SEDESOL 等の支援により行ってきたためである。現在は第一フェーズで「活動のアイデアはあるが、具体化は出来ていない段階」と認識されており、グループが更に成熟した結果、「アイデアが具体化され、住民自身で計画を作れるようになる段階」になると第二フェーズに進めるという整理である。この段階で SEDESOL 専門家による研修や連邦政府機関への申請へ協力内容に移す予定である。

第4章 所感

(1) 目的・計画と達成状況

本調査団の目的は概ね達成されたものの、一部課題の残るものとなった。パイロットプロジェクトのサイト視察、活動している帰国研修員・関係機関との協議および REDCAM 地域会議を通じて、各国の現況および課題に基づいた今後のビジョンを描き、共有できたことは最大の成果である。基本的には8カ国すべてにおいて過去の取り組みを踏まえた今後3年間の方向性は共有できている。

また、本年度地域会議では地域ネットワークの幹事国を透明性・公平性を確保した選挙によって選出し、役割と実施体制を確立できた。昨年度までは JICA 担当ナショナルスタッフと各国 REDCAM 代表者（ナショナルコーディネーター）との間で必ずしも良好な関係を築けていなかったが、国別やグループ分けしたワークショップによる密な議論を通じて、両者の関係が大幅に改善したものと見て取れた。

課題としては、生活改善アプローチの実践経験の面的拡大を図るためのビジョンが、たとえばグアテマラのような中小規模の NGO 主導の国において、十分に描くことが出来なかったことが挙げられる。この点に関しては後述する。

(2) 在外補完研修実施結果

本邦研修終了前に実施された評価会では、2010 年度研修員よりコミュニティでのファシリテーション技術をより深めたいという意見が挙がっていた。本邦研修での理解と帰国後の実践をつなぐ場を必要としている段階に来ていたと考えられる。在外補完研修は単にサイト視察や講義、協議だけのプログラムではなく、実際に現地でワークショップを行うことも大きなコンポーネントであった。実際にスペイン語が通じるコミュニティメンバーに対して、研修員は本邦で学んだファシリテーション手法を実践し、振り返りを重ねた。

コスタリカにおいてはこれまで本研修の在外補完研修経験が十分にあり、JICA コスタリカ支所、MAG の協働により極めてスムーズな研修が実施できた。サイト選定にあたっては MAG が主導で決定したが、ワークショップ実習のためのサイトは「これまでパイロットプロジェクトを実施しておらず、これから MAG として始めようとしているコミュニティ」が対象となった。2010 年度研修員が帰国後にパイロットプロジェクトを始めるための実習として、ワークショップを行うわけであるが、すでに MAG が支援を始めているサイトよりも、生活改善アプローチを知らないコミュニティの方が実習サイトとしては適切である。一方

で、研修員だけでなく日本人も含めた JICA 関係者も多く同行する在外補完研修は、コミュニティにとっても注目度が大きく、MAG がこれから始める際にも有益である。このように、MAG は在外補完研修を戦略的に活用し、win-win の関係を築くよう企図されている。

グアテマラは本年度が初めて訪問先となったが、滞りなくプログラムは実施された。特に、帰国研修員の活動体制が異なるサイトを複数視察できたことは、2010 年度研修員にとって大きな収穫であったと思われる。コスタリカと違って先住民族地域というスペイン語でのワークショップ実施が困難なサイトにおいて、複数の帰国研修員が役割分担をして活動にあたる例（サイト③）、コミュニティリーダーを軸としてあくまで普及員は彼らの活動に寄り添う形で支援する例（サイト④）は、ケーススタディーとして考察する上で貴重な題材を提供した。一方で、先住民族言語のコミュニティにおいては研修員によるワークショップは実施できないため、このようなサイトだけの視察では実践経験を積むことは出来ない点に留意が必要である。

サイトおよび関係機関訪問に加えて、REDCAM 地域会議の一部にも同席し、REDCAM 全体の現況を理解した上で、研修員はアクションプランを発表した。詳しくは添付資料にあるが、研修員は生活改善アプローチの様々な要素・特徴を、各々の表現で発表していた。講義やテキストの内容を自分の理解として咀嚼できていることが窺われる結果となった。

(3) 帰国研修員の活動について

・対象コミュニティの思考変化と気づき

コスタリカの AMAGRO で活動している帰国研修員らは、活動開始前は汚水処理等の環境問題についてのパイロットプロジェクトを想定していた。しかし、それを住民に押し付けずに住民自身で活動内容を特定するように働きかけた。コミュニティの協議結果として決定した活動は栄養改善や自己啓発といった、帰国研修員らが当初想定していたものとは異なる結果となった。

グアテマラ帰国研修員によると、コミュニティに同様の働きかけを行うと、最初は保健・衛生分野の問題意識が挙げられ、同分野の解決策が話し合われる。しかしその後の話し合いの中で、同問題と栄養との強い結びつきが指摘され、食糧確保へと目が向けられるという。さらに食糧の自給のためのリスクや周辺地域の環境問題と問題意識が発展していく。帰国研修員らの働きかけによって、住民の考える場（三層五段階思考の第二層）がもたれ、コミュニティを取り巻く問題の連鎖に気づくことにつながっていることが窺われる。

メキシコの例としては、活動を支援している SEDESOL 関係者によると、「事前にワークショップで問題分析をしていたため、実際に活動を開始する前に保健と経済の関係が理解されていた。つまり病気になると病院の診察代や薬代がかかるため、経済的な負担が増すという理解ができていた。」。保健省による保健・衛生分野の知識普及だけでは実際の生活改

善活動に結びついていなかった状況が、帰国研修員らのファシリテーションにより、住民自身が持っている知識間の関係を理解し、活動に結びつけることができたことと推察される。

次項で述べるとおり、帰国研修員によって活動の方針は異なるが、各サイトにおいて住民自身が考える場を用意し、それによって住民自身が問題間のつながりを理解するプロセスがあったと考えられる。これがグループの活動目的を明確化させ、住民の自発的な活動の基礎になっていると思われる。

・コミュニティへの働きかけの整理について

約3週間に及ぶ本調査団滞在中に、パイロットプロジェクトは合計6サイト訪問することができた。各サイトによってコミュニティの文化的・経済的・地理的環境が異なるが、その上で表4に示すような違いが見られたことは興味深い。

大きく分けて、グアテマラの4サイトとメキシコ、コスタリカの2サイトで分けられる。すなわち、グアテマラの Totonicapán の例などでは、住民グループからの研修ニーズに対して、帰国研修員は実施できる研修メニューを提示し、そこから研修および活動が開始した。一方で、コスタリカの AMAGRO では特に「自分で考えさせる」ファシリテーションを重視し、個人の目標、コミュニティの目標を話し合わせた。このワークショップの中で、個人レベルの活動は、場合によっては帰国研修員に相談すらく、住民によって進められている。メキシコの Oaxaca の場合も、SEDESOL の明確な方針の下で、資金的な支援なく進められている。上述したとおり、第一フェーズは「お金をかけない改善活動」に集中しており、この期間は主に生活の改善そのものよりも、コミュニティの能力を強化し、その後の公的支援プログラム（お金をかけた改善活動）による支援が有効に機能するように考えていると推測できる。条件付資金援助が主な開発プログラムであるメキシコでの普及員に醸成されてきた問題意識に起因するものと思われる。

JICA 技術協力コンテンツ「生活改善アプローチによるコミュニティ開発」（JICA 筑波 2006年6月）には、コミュニティのグループおよび普及員の成熟度に応じた働きかけの類型化がなされている（「無我夢中型」→「おんぶ型」→「二人三脚型」→「手をつないで歩く型」）。今回の調査では同類型と表4にまとめた各国帰国研修員方針との関係まで整理できなかった。今後の課題として問題提起しておきたい。

表4 各国におけるコミュニティへの働きかけの違い

	AMAGRO (コスタリカ)	Totonicapán, Sololá (グアテマラ)	Oaxaca (メキシコ)
当初活動内容の 決定方法	住民が個人の目標を考えて活動を決定した。帰国研修員への相談なく開始したのもあった。	普及員がメニューを提示して住民が選択したものの、グループと普及員の協議によるものがある。	住民がグループごとで協議し、活動内容を決定した。最初の活動以降は、グループの意見を委員会で協議して決定している。
活動初期の支援 方法	問題認識や自助努力による改善のファシリテーション、能力開発研修の実施。	ワークショップに加えて、技術的支援および資機材・資金等の支援。	問題認識や自助努力による改善のファシリテーション、能力開発研修の実施。
今後の方向性	グループ活動の段階に進み、行政や民間の支援を紹介して申請できるように支援していく。	技術支援を減らし、最終的には資機材も自力で調達できるようにする。	活動の構想を住民自身が具体的な計画にできれば、第一フェーズ終了。第二フェーズは既存の行政プログラムに結びつける。

・政策への導入

現在のところ、REDCAM8 か国の中で中央行政のレベルで政策への導入可能性が検討されているのはコスタリカとメキシコのみである。コスタリカの場合は準高級コースの帰国研修員が MAG の意思決定層にいることにより、ECADERT の推進と結びついて生活改善アプローチが国家政策レベルで導入を検討されている。

メキシコの場合は、生活改善アプローチの特に「考える農民の育成」という要素が、すぐに資金的支援に進むキャパシティがないコミュニティに対して、そのステップに進むための橋渡し・準備活動としての機能を果たしうると認識されていることが窺われる。この観点で言えば、「既存の行政支援プログラムへの並列的追加」ではなく、「既存プログラムの実施前に位置づける」という整理が適切なようにも考えられる。

今後この動きを進めるために、両国ともに日本人専門家の派遣の必要性を訴えている。特にパイロットプロジェクトの評価に関して要望が高い。帰国研修員は日本の経験としての生活改善アプローチと自国に応用したアプローチとの間に異なる点があるとしつつも、やはり生活改善アプローチに習熟した専門家のアドバイスが必要な段階を抜けていないという認識である。この評価は実際の活動を改善・軌道修正するためのみならず、所属組織内で同活動が認められる後押しのためにも、日本人専門家が派遣されることは意義深いという点も指摘されている。

(4) 地域会議、マネジメント上の課題

今回、来年度以降の更新案件の展望を説明した。すでにテレビ会議を通じて各国事務所には説明をしていたが、地域会議での説明では特に本邦研修期間の削減に関して、ナショナルスタッフおよびナショナルコーディネーターから当初大きな反発があった。このことは TV 会議での説明会の内容が不十分であったことも反省する必要があるが、一方で TV 会議を通じた説明の限界も痛感させられる結果であった。結果としては ODA 全体の状況、中南米における農村開発分野の状況を踏まえ、JICA 筑波側が考える意図を説明し、一定の理解を得ることが出来たと考えている。この時点で彼らの理解を獲得し、各国 REDCAM の 3 年間の計画作成に進むことが出来たことは、「ネットワークの形成」の先に進むためには必須のことであり、これは関係者が一同に会する地域会議なしには成しえなかったと思われる。

地域会議での選挙の結果、来年度の地域会議まではコスタリカ REDCAM が幹事国を務めることと決まった。マネジメント上の課題として、過去の教訓から個人で地域ネットワークのリーダーを務めることは困難であるという意見があり、選挙では個人ではなく国で選出した。この際、副リーダーは他国から選出するべきとの意見もあったが、他国よりも同国内で選出した方が連絡・協議が容易であることから、今回は幹事国のみ選出し、選出された国が副リーダーの選定も含めて対応することで合意がとれた。コスタリカ帰国研修員の大半は MAG に所属しており、また MAG の意思決定層が帰国研修員ということもあり、次回地域会議までの運営には大きな懸念はない。一方で来年度以降、このような組織的な対応が難しい国が選定されることを想定すると、より負担の少ないマネジメント体制の検討も進める必要がある。

また、JICA 事務所のナショナルスタッフも、各国 REDCAM メンバーではないものの、事業の実施上極めて重要な役割を担っている。予算管理、各種報告書の提出サポート、パイロットプロジェクト実施についての相談など、彼らなしでここまでの成果を出すことは難しかった。一方で、ネットワーク活動支援予算の支出等、事務所によって大きく方針および手続きが異なり、REDCAM 活動の土台となるこのような実施上の検討事項も見出された。

また、専門家の同行がないと活動の評価は困難であるとの意見が多かった。生活改善の研修を受けていないナショナルスタッフには「本当に良いことをやっているのか」判断ができない。ナショナルスタッフの一致した意見として、これまで経緯に関する明確な情報が得られておらず、筑波側からの一方的な押し付けと感じていた。TV 会議では説明を重ねてきていたものの、意思疎通の限界が明らかになった。一方でナショナルコーディネーターと合流する前に JICA 内で忌憚のない意見を共有できたことが、その後の地域会議を円滑に進めるために大きな役割があった。

(5) むすび

上述してきたように、日本の生活改善アプローチによる農村開発の経験は、各国の状況に合わせて応用されている。サイト視察を通じて印象的だったことは、コミュニティの住民のみならず、帰国研修員および協働している普及員のモチベーションが極めて高かったことが挙げられる。各サイト視察および関係者へのインタビューを通じて、図1のようなサイクルが浮かび上がってきた。

研修員が本邦研修で学んだ生活改善アプローチが帰国後の活動の中で実践され、普及員の活動に変化が起こる。これによって住民は自ら考える場を持つことになり、日本の「小さく活動を始める」、「地域資源の活用」といった要素を参考にしながら活動を進める。これを目にした帰国研修員および協働する同僚のモチベーションが高まり、さらなる創意工夫を凝らしたファシリテーションがなされ、住民に働きかける。厳密にどのタイミングでどのような変化が起きているのかは、さらに詳細な調査が必要である。一方で、この普及員の活動を変えたものが、生活改善アプローチのどんな要素であるのか、という点も今後調査すべき大きな課題である。本コース帰国研修員とその関係者の努力により、JICA が技術協力コンテンツを作成した当時には存在しなかったレベルの応用事例が蓄積されつつある。また各国の政策レベルの取り組みにも反映されつつある一方で、生活改善アプローチとは何か、日本の経験の何が役立つのかといった疑問が改めて提起されている。

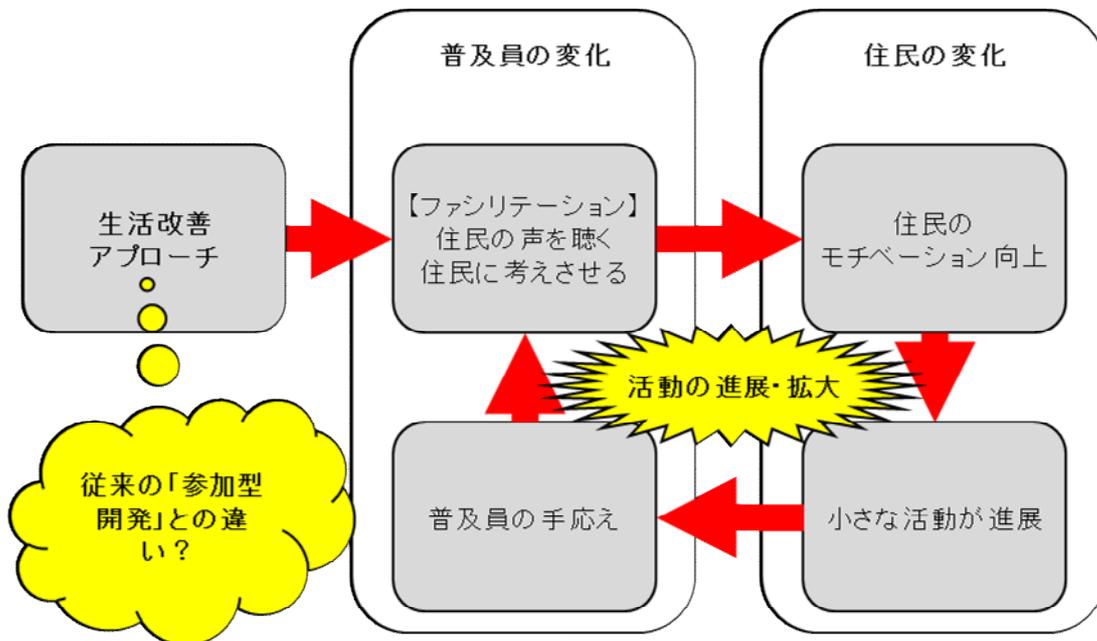


図1 各サイトにおける変化の構造

REDCAM として今後取り組んでいく必要があることは、特に過去の活動の体系化・普及とネットワークとしての活動方針の明確化である。前者についてはコスタリカを中心として詳細なマニュアル作りが取り組まれており、現在は改訂作業中である。メキシコでも同様の取り組みがあり、同マニュアルの共有・改訂は今後の地域 REDCAM の大きな役割の一つとなる。後者については地域会議結果を踏まえ、各国 REDCAM が JICA 事務所と協議の上で 2011 年度中に JICA 筑波に 3 か年計画を提出する予定である。メキシコ、コスタリカを除く国では中央省庁を軸とした面的拡大の方向性が明確に定まっていない。特に今回の調査中にグアテマラ等の NGO を中心として REDCAM が構成されている国の展望を描くことが課題であったが、「REDCAM が NGO をつなぐ媒介となる」以上の展望を示すことはできなかった。国別の事情に合わせ、引き続き REDCAM の可能性を模索していく必要がある。

最後に、本研修実施にご協力いただいた本邦有識者、REDCAM コース委託先であるアイ・シー・ネット株式会社、グアテマラ、コスタリカ、メキシコの帰国研修員および関係者のご尽力に対し、あらためて、この場を借りてお礼を申し上げます。

以上

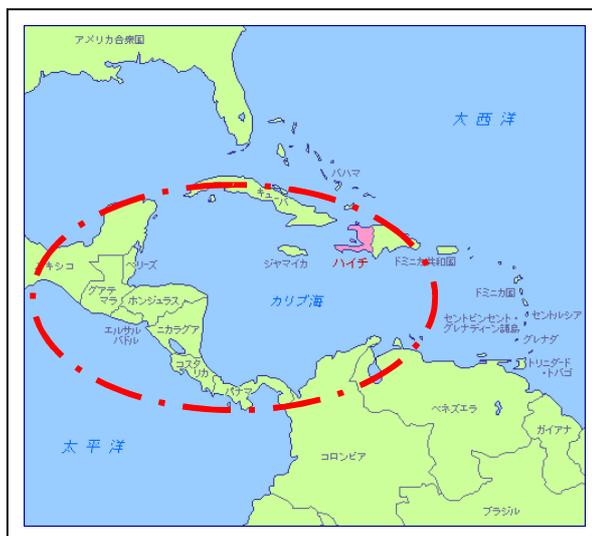
別 添 資 料

1. 平成 22 年度「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」本邦研修概要
2. 現地協議録
3. コスタリカ帰国研修員の発表資料
4. 地域会議資料（JICA 筑波）
5. 狐崎団員資料
6. パイロットプロジェクト評価シート（Vivamos Mejor 協会）
7. 地域会議ワークショップ「地域 REDCAM について」実施結果
8. メキシコ SEDESOL 活動報告資料

平成 22 年度 「中米カリブ地域 住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」 本邦研修概要

1. 背景

JICA 農業／農村開発分野の課題別指針では、開発戦略目標のひとつに“**活力ある農村の振興**”をかかげ、そのうちのサブ目標に“**生活改善の推進**”を取り上げている。生活改善の推進は、伝統的な色彩の濃い農村部における意識の近代化、民主化を末端単位で準備する意味合いが大きく、栄養改善事業、かまど改良事業、健康・保健事業などの個々の生活技術や生活環境の改善の結果が期待できる。同時にその後続くより大きな地域の発展や開発の過程に対する受容やそれらの活動へ自らの参加を左右する影響力を持つ点からも重要な活動であり、活力ある農村の振興を図る上では基礎的かつ、重要な開発事業としての「生活改善事業」の普及が望まれる。



JICA は、平成17 年度から19 年度まで3 年間にわたり、中米カリブ地域研修「住民参加型農村開発プロジェクト運営管理」を実施し、これらの研修の成果を受け平成20 年度から22 年度までの3年間は、帰国研修員間のネットワーク活動の強化目的とした「住民参加型農村開発ネットワーク運営・管理」を実施している。

本研修は、日本の戦後農村開発の経験である生活改善の中米カリブ地域での活用、帰国研修員による自国での具体的な取り組みの発現、在外事務所ナショナルスタッフの主体的参加の促進、各国のプログラムとの連携強化を目指し、以下の実績を得ることが出来た。

- (1) 8 カ国、81名の研修員（うちC/P 枠は3 名）の参加
- (2) 延べ35名の帰国研修員の現地プログラム（於パナマ）への参加
- (3) 延べ42名のナショナルスタッフの現地プログラム（於パナマ）への参加
- (4) パイロットプロジェクト実績は28件：主に生活改善アプローチの活用のための活動となった。
- (5) 各国レベルの帰国研修員ネットワークの取り組み実績は8 カ国、生活改善アプローチのための教材作り、生活改善アプローチ紹介のための研修・セミナー開催などが実施された。
- (6) 地域レベルの取り組みも開始されたが、8 カ国のネットワークを結びつけて各国での情報や活動経験の共有を図るものとして整理された。

本研修は上記背景を踏まえ、本コースは平成20年度から3 ヶ年にわたり、日本の生活改善の経験を更に中米カリブ地域へと活用促進することと、各国及び地域レベルで形成されている帰国研修員ネットワークを強化することを目指して実施する。各国帰国研修員ネットワークの強化にあたっては、各国の制度や政策、ガバナンスの状況、JICA 協力の実施方針などを十分に分析し、国毎の独自な方策の検討を図ることとする。

また、生活改善の活用促進を目指した帰国研修員ネットワーク活動を支援するものとして、本研

修に先立って実施した地域別研修「中南米地域農村部生活改善を通じた女性のリーダーシップ育成セミナー」（平成19年度～平成21年度）および中南米地域「生活改善を通じた農村開発」（平成22年度～平成24年度）の帰国研修員との協働が期待される。

本研修の参加者は、おもに下記の条件で集められた。

- (1) 中央または地方政府機関の職員として農村部におけるコミュニティ開発部に従事する者
- (2) NGO 職員として農村部におけるコミュニティ開発部に従事する者

具体的には、現地での農業改良・生活改善普及員や地域開発に関わるソーシャルワーカーや研究者と多岐にわたるが、ほとんどが活動現場を持ち自国での生活改善活動に従事している。

2. 詳細事項（研修全体の内容）

(1) 対象地域・国名：中米・カリブ地域

メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、ドミニカ共和国

(2) 対象機関の要件：農村部においてコミュニティ開発に取り組んでいる以下の機関

- (1) 中央または地方政府機関
- (2) NGO、大学

(3) 定員数15名：メキシコ (3)、グアテマラ (2)、エルサルバドル (2)、ニカラグア (2)、コスタリカ (2)、パナマ (2)、ドミニカ共和国 (2)

(4) 言語：西語（スペイン語）

(5) 目標（アウトカム：研修全体での達成目標）

参加研修員は、日本の生活改善アプローチを活用した農村部におけるコミュニティ開発を実施するのに必要な能力を開発し、小さな生活改善活動を実践、及び Learning Project プロポーザルの作成・提出を行う。また帰国研修員を核とした中米・カリブ地域参加型農村開発ネットワークの活動を年間計画に基づいて各国レベルで実践し、その結果について地域レベルで共有する。

(6) 上位目標（研修目標達成後の中・長期的な目標）

中米・カリブ地域において、帰国研修員が中心となった参加型農村開発ネットワークの活動により生活改善の活用に関する経験・情報の共有が促進され、より効果的な住民参加型農村開発プロジェクトが実施される。

(7) 成果（アウトプット：研修内の個々のプログラムで達成が期待される成果）

- (1) 日本の生活改善アプローチの概略と中米カリブ地域における活用事例について、帰国研修員ネットワークの支援を得て理解する。
- (2) 日本の生活改善アプローチを通じた農村生活の向上に係るコンセプトやアプローチについて、研修教材を活用しながら実践できる。
- (3) 農民グループ支援の為の生活技術及び普及手法などについて、研修教材を活用しながら実践できる。
- (4) 帰国後に所属組織の支援を受けながら、設定したターゲットグループを対象として、小さな生活改善活動の実践を働きかける。

別添 1

- (5) PCM 手法の概略（特に PDM の Narrative Summary のロジックフレーム）について、ナショナルスタッフの支援を得て理解した後、学び、気づきを活かした Learning Project のプロポーザルを作成する。
- (6) 既に活動を行っているメンバー、NS と連携しながら、帰国研修員ネットワークの活動について各国及び地域レベルで実践すると共に、採択された Learning Project の実施及び実施プロセスからの学びの抽出を行う。

以上